

## 第5章　まとめ

### 第1節 伽藍地の範囲と伽藍配置

#### (1) 伽藍地について

1) 範囲の判定 尼寺の伽藍地周囲には僧寺同様に築垣や溝が廻ることが推定されたため、調査ではまず築垣跡の確認に努めた。この結果、9トレンチで北辺築垣の一部が確認され、伽藍地北辺を確定する根拠となった。また、5・6・6トレンチの調査で、築垣北東隅から南に、東辺築垣基部残痕と判断される高まりが連続してみられたことで伽藍地東辺を確定するための根拠を得た。南辺築垣は、平成12年の前橋市教育委員会による確認調査で、南東隅及び南西隅の基部とされる遺構が確認されたことなどから、高崎・前橋の行政境に重なるように存在することが指摘されており、今回、両市が連携して調査を進めたところ、高崎市側では7トレンチで築垣の内側に沿う溝状の掘り込み、前橋市側では築垣外側に沿う溝をそれぞれ確認し、築垣の痕跡は未確認だが、両者間に存在していた可能性が高く、従来の知見を一步進めることができた。

西辺では10トレンチを設定して調査したが、明確な築垣跡を見出すことができなかった。なお、東辺の築垣推定ラインを伽藍中軸線で西へ折り返して、西辺の築垣推定ラインを設定したところ、同ラインと重なる位置に溝(SD1)が存在することが判明した。現時点ではSD1が伽藍地の区画に関わるものと判断し、伽藍地西辺判定の根拠とした。

北辺・東辺・南辺の各築垣内側及び外側には、溝状あるいは土坑状の掘り込みが存在し、壁体構築用の土取りと雨落溝を兼ねたものとされる(註1)。このため、伽藍地範囲は築垣外側の掘り込みを含めた162m(540尺=1町半)四方と推定した。

2) 周辺各國との比較 周辺各國分尼寺跡の伽藍地平面規模と区画施設の構造は以下の通りである。

武藏国分尼寺跡：南北160m・東西150m、溝(幅5.0m～2.1m・深さ1.5m)。

上総国分尼寺跡(B期)：南北200m前後・東西173m、溝および簡易な構造の築地塀。

常陸国分尼寺跡：南北1町半(西溝は延長150mほど)・東西1町(講堂付近で約105m)、溝(幅約3m)。

下野国分尼寺跡：南北205m(700尺)・東西135m(450尺)、掘立柱塀(築地塀に改修)・溝。

信濃国分尼寺跡：南北150m・東西148m(80間四方)、溝・石敷。

上記5例の伽藍地区画平面形について、上野国分尼寺跡と同様に矩形を示すものは、武藏国・信濃国で、ほかは南北に延びた長方形であるが、区画東西長はいずれも1町半(540尺)～1町(360尺)にほぼおさまっている。また、区画施設は武藏国と常陸国が溝のみで、他は築地塀の存在が推定されている。

3) 伽藍地西辺区画について 今回の調査では伽藍地西辺では区画と関連する溝(SD1)を確認したが、築垣など遮蔽を目的とした施設の痕跡は明確では無く、後世の開墾等で築垣が削平された可能性が高い。ただし、SD1及び周辺における瓦片の出土が、北辺や東辺の調査区と比べると顕著に少なく、このことから西辺区画施設は築垣ではなく、板塀など簡素な構造であった可能性が高い。上野国分尼寺の付属院地は、河川が近い伽藍地の東側には求めにくいことから、北側あるいは西側に存在したと推定される。仮に大衆院が西側に存在したとすれば、伽藍地西辺の区画が簡素な理由を示すことになる。

#### 4) 今後の課題

① 築垣の構造について 現状では、築垣の上部構造が判明したのは北辺築垣のみである。東辺及び

南辺は、後世の農道とほぼ重なるため削平が進んで平坦化している。遺構としては築垣内外に構築された溝状掘込を認識できたのみで、北辺と規格を同じくする基部幅や周囲で出土した瓦片や壁体の一部と判断される粘性土ブロックの存在から築垣の存在を推定している。なお、調査箇所が限定されたこともあり、僧寺で確認された寄柱や先行する掘立柱塀の痕跡は確認できなかった。今後、調査箇所を広げ、資料を蓄積していくことが必要である。

② 門跡について 今回、伽藍地各辺に推定される門の位置を特定できなかった。昭和45年(1970)の調査で推定された東門跡は掘立柱建物跡と判明したが、尼寺との関連は明らかになっていない。なお、2トレンチで確認した掘込地業痕跡は、金堂跡の東に位置することからも東門跡のものである可能性が高い。また、7-3トレンチ南端部で確認された掘込地業痕跡は、南大門のものである可能性が有り、伽藍中軸線で西に折り返すと掘込地業の東西長は15.8mで、上部に五間門(10尺等間)を推定することができる。これの確認のために、2トレンチ、7-3トレンチ周囲を調査することが急務である。

## (2) 各堂宇について

### 1) 金堂跡

① 規模・構造 東半部の調査成果から西半部を復元し、北東隅・南東隅の礎石抜き取り痕から建物規模は東西24m(80尺)・南北13m(44尺)、基礎は掘込みによる總地業で平面規模は東西26.5m・南北20.2mと推定される。また、基壇外装にかかる遺構として、回廊との取り付き部を含めた南東隅部に凝灰岩切石が列状に置かれ、東辺北側や南辺中央付近では平瓦端部を上下として列状に埋めた「瓦列」を確認した。

② 周辺各國との比較 周辺各國分尼寺金堂跡の規模・構造は以下の通りである。

上総国分尼寺跡：桁行7間(78尺)・梁行4間(44尺)、基壇は瓦積で東西30m強(100尺)・南北20m弱(66尺)・高さ1m前後、南面中央に階段(幅12尺・出3尺)、掘込地業の平面規模は基壇規模より小さく東西19.8~19.7m・南北約18m・深さ60cm前後。

武藏国分尼寺跡：桁行20.76m(70尺)・梁行12.56m(42尺)と推定。基壇復元規模は東西26.7m(90尺)・南北18.5m(62尺)、版築は高さ約1.6m残存、礎石や基壇外装は失われる。

下野国分尼寺跡：桁行7間・20.9m(69尺)・梁行4間・12.1m(40尺)。基壇は切石積で正面27m(89尺)・側面17.6m(58尺)で高さ85~80cm、階段は南正面(幅約3.03m・約10尺)と北正面(幅約3.04m・約10尺と推定)に有する。基礎は掘込による總地業で基壇上面までの厚さは1.4m。

相模国分尼寺跡：桁行5間・21.2m(70尺)、梁行4間・13.9m(46尺)の四面庇付き五間堂、基壇は正面26.6m(88尺)・側面19.3m(64尺)、基壇外装は葺石状基壇、基礎は掘込地業。

信濃国分尼寺跡：桁行7間22.4m(約75.92尺)・梁行12.4m(約40.92尺)、基壇は正面29.7m(約98尺)・側面19.5m(約64尺)・高さ50cm、基壇面から約1.5mの厚みで版築、石組の雨落溝を有する。

上記の金堂跡の建物平面規模をみると、桁行7間・70~80尺、梁行4間・46尺~40尺におさまる、大きな差は無い。上野国分尼寺の金堂は上総国分尼寺と同様規模と推定され、周辺各國分尼寺の中では大きめの部類に属する。また、基壇は周辺各國の多くで高まりとして残存しており、上野国分尼寺跡の基壇は削平が進行して平坦となっているが、本来は50cm以上の高さはあったと思われる。

③ 基壇外装について 上野国分尼寺金堂の基壇外装は、南東隅で凝灰岩切石列が残存したことから切石積と思われ、基壇の出は8尺ほどと推定される。ただし、北東隅付近では凝灰岩切石列の痕跡はみられず、該当部に「瓦列」が存在した。また、北辺では凝灰岩切石列や「瓦列」の痕跡は確認できなかった。基壇の残存状況を考慮する必要があるが、四周が切石積であったかどうか、また「瓦列」の性格について、今後さらに調査を進めて検討する必要がある。また、南辺中央部では階段の存在が推定されたが、該当部の基壇裾は廃絶後の掘り込みで当初の形状が大きく損なわれており、基壇外装の痕跡は無く、凝灰岩塊が少量みられたのみであった。そして側柱推定ラインから4.5m(15尺)外側・基壇推定ラインから2.1m(7尺)外側に「瓦列」がみられ、上総国分尼寺跡のように階段の出が基壇から3尺としても階段の1.2m(4尺)ほど外側で、基壇外装とは考えにくい位置である。このことから、北東隅の「瓦列」と南辺中央部の瓦列が同一の性格なのかどうか検討するとともに、類例を調べていくことが重要となる。なお、現時点で判明している数少ない例として、下野国分寺講堂跡の基壇外装の地盤石抜き取り痕から約60cm(2尺)外側で、平瓦端部を上下とし凸面を外に向かた瓦列が存在し雨落ちとされている(註2)。

④ 今後の検討課題 今回の調査は、金堂東半部の基壇及び基礎地業の範囲確認が主目的であった。このため西半部の調査は急務であり、あわせて柱痕跡を慎重に調査した上で、建物規模・構造を明確にしていかなくてはならない。

## 2) 回廊跡

① 規模・構造について 回廊は金堂南面底の間にとりつき、未調査ではあるが中門にとりつくものとみられる。北西隅でほぼ原位置の礎石が残存し、南東隅では礎石は失われるが原位置を留める根石がみられたこと、さらに東面回廊北半部で内筋柱列の礎石5か所が原位置に近い状況で残存していた。このことから建物規模が概ね判明し、単廊で梁行4.2m(14尺)で隅間が4.2m(14尺)四方、東西・西面の柱間は3.0m(10尺)、北面では3.6m(12尺)の等間となる。回廊建物の平面形はやや東西に長い矩形で、規模は回廊四隅の柱芯々距離で東西52.8m(176尺)・南北41.4m(138尺)である。基壇は版築や盛土で築かれ、15トレンチの所見から幅8m程度であったと推定され、内側・外側柱列から基壇縁までの平坦部には黄橙色系のシルト質土が貼られていたとみられる。なお、基壇外装は不明である。

② 周辺各国との比較 周辺各國の国分尼寺回廊跡の規模・構造は以下の通りである。

上総国分尼寺跡：金堂及び中門に取り付く単廊で礎石立ち、梁行12.5尺で隅間12.5尺四方、このほか柱間は10尺が基本で中門や隅間への取り付き部は9尺や9.5尺、回廊建物の平面形はやや東西に長くわずかに歪んだ矩形で、四隅外側柱の芯々距離は、東面・南北42.34m、西面・南北43.03m、南面・東西54.36m、北面・東西55.06m、基壇は瓦積で幅6m(20尺)、掘込地業は幅4.2m~4.9m・厚さ50cm~60cmで基壇幅より狭い。

下野国分尼寺跡：金堂及び中門に取り付き、礎石は明らかでない。基壇は突き固めで構築され幅は6~10mで単廊とみられる、平面形は東西にやや長い矩形と推定され東西回廊基壇の南北長は約44.8m(148尺)で南面基壇の東西長は51.5m(170尺)と推定、基礎は掘り込み地業で基壇上面から70cmの深さである。

常陸国分尼寺跡：中門跡に取り付く。南面回廊西半部から回廊南北隅及び西面回廊の一部を調査。北面回廊は講堂に取り付くと推定。回廊基壇は幅約7.2m、版築で構築されるようで、西面回廊は南北約72mと推定され、南面回廊は中門西側から南西隅27mが調査

され、東西長を推定すると 74m 前後と推定される。

信濃國分尼寺跡：金堂及び中門に取り付く単廊で礎石立ちで、柱間はいずれも約 3.3m(10.85 尺)。

基壇幅は約 7.4m(約 24.4 尺)で、床面は礎石混土を突き固めて縁部に自然石を配する、建物の平面形は南北に長い長方形で、南北長は 82.5m(約 271 尺)東西は 54.8m(約 180 尺)と推定される。

なお、武藏國分尼寺では回廊が無く、中門左右から延びる掘立柱塀(柱間 2.4m・8 尺)及び 6~7m 幅の溝が金堂・講堂・尼坊を区画(中枢部区画)し、範囲は東西 89.1m(300 尺)・南北 118.78m(400 尺)である。同様に下総國分尼寺でも回廊が無く、金堂・講堂を開み掘立柱塀と溝がめぐらされる。

上記の状況から、上野国・下野国・上総国・国分尼寺回廊の平面規模はほぼ近似し、信濃國分尼寺では講堂に取り付くため南北に長くなるが東西長はこの 3 国とほぼ同様である。このことから国分尼寺の回廊東西長は 170~180 尺で約半町の規模が多く、伽藍地の東西長が 1 町半(540 尺)~1 町(360 尺)の規模となることから、伽藍地東辺区画から東面回廊一金堂院の東西長一西面回廊から伽藍地西辺区画における各々距離の比率は、概ね 1:1:1 あるいは 0.5:1:0.5 となることが意識されていた可能性がある。

③ 今後の検討課題 現時点では未確認となっている中門跡を含めた南面回廊西半部や、回廊南西隅の状況を確認する必要がある。なお、回廊基礎地業は礎石下など一部では入念な掘込地業が行われていたが、内外の据部では整地土と判別困難な比較的大雜把な盛土で構築されていることが多く、地業範囲を確定するためにはより広範囲に調査区を設定する必要がある。また、改築の痕跡はみられなかったが、南面回廊地業内ののみ瓦片混入が顕著な理由について、構築工程を踏まえての検討も必要となる。

一方、東面回廊地業下でみられた別工程と判断される掘込地業について、規模や性格の解明は重要な課題となっている。この掘込地業は金堂跡の南東に位置することが注意され、下野国・常陸国・上総国・国分尼寺跡では金堂跡の東側で各々建物跡の存在が知られる。こうした建物跡は、下野国・国分尼寺跡で仮金堂跡、常陸国・国分尼寺跡で仮の造仏所跡、上総国・国分尼寺跡では創建からやや遅れて建てられた仏堂と推定され、前二者は仮設の建物として理解されている。

### 3) 尼坊跡

① 規模・構造について 昭和 45 年(1970)の調査個所を含めるとほぼ全域が発掘されている。礎石は 10 か所で存在が知られていたが、今回、このうちの 6 か所の残存を確認し、このほかの抜き取り痕跡から身舎は桁行 15 間の 10 尺等間(45.0m・150 尺)、梁行 2 間で南北に各 1 間の庇がつく 8+10+10+8 尺(10.8m・36 尺)の切妻造建物であることが判明した。なお、昭和期調査で講堂跡(桁行 6 間)と推定された際に東側棟持柱のものとされた礎石(残存せず)は棟通り房境柱のものである可能性があるが、このほかには房境柱の痕跡は確認できなかった。なお、基壇構築面は広範囲に失われ、縁部の形状や基壇外装は不明である。また、基壇裾部に黄褐色系粘性土が厚さ 5~20 cm で貼られており、同粘性土の分布から、基壇の平面規模は掘込地業部分の平面規模(東西 51.3m・南北 13.6m) よりわずかに広がるとみられる。

② 周辺各国との比較 周辺各国の尼坊跡の規模・構造は以下の通りである。

上総國分尼寺跡(B I 期)：桁行 9 間(3 間 3 房)・梁行 4 間の南北庇付切妻造りの礎石建物と推定、

掘込地業平面規模は東西 34.6m・南北 14.4m。

(B II 期)：桁行 15 間 44.33m(148 尺・3 間 5 房)・梁行 4 間 10.48m(35 尺)、四面庇付の掘立柱建物、小字坊(桁行 15 間・梁行 2 間の掘立柱建物)が北に併設。

(BIII期)：ほぼ同位置・同規模で礎石建物(壇地業)に改築。

武藏国分尼寺跡：桁行15間44.55m(48尺・3間5房)・梁行4間8.91m(30尺)、礎石建物(壇地業)。

信濃国分尼寺跡：桁行5間+馬道+5間で44m(145.5尺)・梁行3間で8.1m(約27尺)の礎石建物、  
基壇平面規模は東西51m(約168尺)・南北14.1m(約46.5尺)、基壇縁に自然石列。

上総国分尼寺では仮設的掘立柱建物(A期)から瓦葺建物(B期)への移行、さらに天平神護2年(766)太政官符による尼の定員倍増に対応したと考えられる小子坊の存在が確認されており、尼坊の建て替えや増築が実情にあわせて複数回行われていたことがうかがわれる(註3)。なお、1棟の尼坊に創建当初における定員10名の収容を考えた際、桁行15間で3間5房という間取りは、各房に2名をあてたとすれば合理性があり、標準的な規格であったとみることができるが、国分尼寺尼坊の調査事例は乏しく、今後の資料の増加を持つ必要がある。

上野国分尼寺跡では、房境の柱痕跡について3間5房を推定して調査をおこなったが、前述した昭和期調査時の礎石確認箇所を除いて柱痕跡は認められず、小規模なため尼坊床面の削平にともない痕跡が失われたと理解した。ただし、上総国や武藏国の尼坊跡では残存する礎石据付穴から、房境の柱が特に小規模では無かったことが窺われ、間仕切り構造が異なる可能性がある。

③今後の検討課題 昭和45年および今回の調査で尼坊内の3分の2ほどを面的に調査したことになる。ただし、昭和期調査では原則として基壇構築面を保護するためか、やや上面で掘り下げを止めていた。このことから、調査の手がほとんどついていない尼坊東側を含めて広く面調査を行うことで、間仕切り構造や基壇縁辺部の構造などが判明することが期待される。また、昭和期調査で地業内への焼土塊混入の所見から、焼失後の再建が推定された。ただし今回確認された焼土混入層はいずれも版築上を被覆しており、廃絶後の堆積と理解され、地業内への焼土混入はみられなかった。このことから焼失による尼坊再建は無いと判断したが、上総国分尼寺のように尼坊の複数回改築の可能性は考えられ、小子坊の存在も含め今後確認に努めていく必要がある。

### (3) 伽藍配置について

#### 1) 伽藍配置の復元(第235図)

今回、主要建物のうち尼坊の規模・構造が判明した。一方で金堂や回廊は未調査部分が多く、講堂は礎石2か所のほか建物痕跡を特定できる所見は得られていない。こうした中で、現時点で可能な限り伽藍配置の復元を試みた。

① 伽藍中軸線 N°1° 27' -W. 尼坊の中軸線を南北に延長した。なお、尼坊の東辺・西辺各々側柱の軸線と東面回廊・西面回廊の内側柱列の軸線は各々一直線上に並ぶことから、伽藍中軸線を基軸とし線対象に建物が配置されたとみることができる。

② 建物配置 伽藍の主要堂宇は、北から尼坊・講堂・金堂・中門の順で直列方向に南面して配されたと判断され、調査で伽藍配置が判明した他国の例を見ても標準的な配置であったとみられる。なお、講堂は現時点で建物位置を特定できず、残存する礎石2か所の位置及び金堂・尼坊の規模が類似する上総国分尼寺の講堂(四面庇付五間堂)を参考とし桁行17.7m(59尺)・梁行12m(40尺)に復元した。また中門は、上総国分尼寺中門の基壇範囲(東西40尺・南北29尺)を参考とした。

各堂宇間の芯々距離は以下の通りとなる。

尼坊-22.8m(76尺)-講堂-24.3m(81尺)-金堂-42.0m(140尺)-中門

周辺各国の各堂宇間芯々距離について以下の通りである。

上総国分尼寺：尼坊—36.6m(122尺)—講堂—43.8m(146尺)—金堂—43.8m(146尺)—中門  
武藏国分尼寺：尼坊—25.39m(86尺)—講堂(推定)—32.67m(110尺)—金堂—49.04m(165尺)—中門  
下野国分尼寺：講堂—32.7m(108尺)—金堂—41.8m(138尺)—中門  
下総国分尼寺：講堂—33m(約110尺)—金堂  
信濃国分尼寺：尼坊—30m(約100尺)—講堂—43m(約141.9尺)—金堂—30m(約100尺)

※1尺：0.297m

上記から、金堂と中門の距離は40～50mの範囲、講堂と金堂の距離は25～35mの範囲に概ね取まる。ただし、信濃国分尼寺のみ両者の距離が逆転し講堂と金堂間の距離が長く、具体的な数値は不明だが常陸國分尼寺でも金堂から講堂間の距離は中門との距離と比べ前者のほうがやや長い。なお、信濃国分尼寺では講堂に回廊が取り付く構造で、常陸國分尼寺でも同様と推定されている。

注意されるのは、上野國分尼寺では尼坊—講堂—金堂の距離が上記類例中最も短いことである。武藏國分尼寺も尼坊と講堂間の距離が短く、講堂跡の基礎地業痕跡が明確ではない点は上野國の状況と共通する。武藏國分尼寺講堂では、武藏國分寺創建講堂と同様な「地上積み上げ部のみの基礎」の可能性が推定されている(註4)。

③今後の検討課題 今回、調査の主目的は伽藍地範囲の確定にあつたため、伽藍内の調査は必要最小限にとどまったが、伽藍配置について昭和期調査の成果をさらに一步進めることができた。ただし現時点で残された課題も多く、特に講堂跡の位置を確定することは最重要であり、範囲をさらに広げて調査を実施する必要性がある。また、昭和44年度調査で確認されている中門跡の再検証も急務であり、さらに現時点で鐘楼・経蔵についての所見が皆無であるため、これらの位置や内容を明らかにすることを目的とした調査も必要となる。さらに、金堂の北西、西面回廊の北延長線上でみられた「壇地業状施設」は小規模建物の基礎地業とも推定されるが、判断材料が少ないため周囲の調査が必要である。優先される課題は以上のとおりであるが、上野國分尼寺跡が良好な状態で残存していることが明らかとなり、今後調査を進めていくことで、諸國の國分尼寺跡や國分寺跡の所見を補充しうる資料に恵まれることが出来る。

註1 『発掘調査のびき—各種遺跡調査編一』文化庁記念物課 2013

註2 a 『下野國分寺展—発掘25年の成果ー』栃木県しづけ風土記の丘資料館 2007

b 山口耕一『下野國分寺』『國分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館 2011

註3 須田 勉『上総國分尼寺』『國分寺の誕生』吉川弘文館 2016

註4 『武藏國分尼寺跡』II 国分寺市教育委員会 1995

#### 主要参考文献

国分寺町教育委員会『下野國分尼寺跡史跡整備事業報告書』1971

上田市立信濃國分寺資料館『信濃國分寺跡』1982

相模國分寺遺跡調査会『相模國分寺関連遺跡詳細分布調査報告書I—相模國分尼寺跡 推定中門・金堂跡の調査ー』

海老名市教育委員会 1990

角田文衡編『新修国分寺の研究 第2巻 織内と東海道』吉川弘文館 1991

角田文衡編『新修国分寺の研究 第3巻 東山道と北陸道』吉川弘文館 1991

栃木県教育委員会『第8回企画展 東海道の国分寺—その成立と展開』1994

市立市川考古博物館『下総國分寺跡 平成元～5年度発掘調査報告書』1994

国分寺市教育委員会『武藏國分尼寺跡』I～IV 1994～1997

角田文衛編『新修国分寺の研究 第7巻 補遺』吉川弘文館 1997

市原市教育委員会『史跡上總國分寺跡 中門・回廊復元事業報告書』1998

国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課『史跡武藏國分寺跡(尼寺地区)保存整備事業報告書』2004

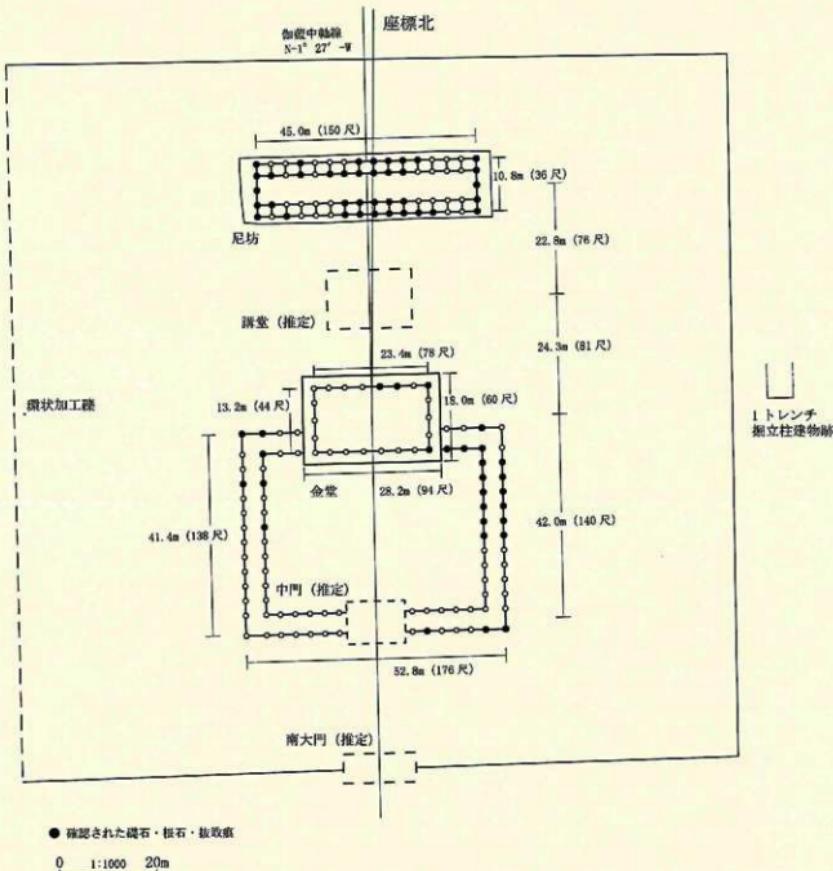
須田 勉・佐藤 信編『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館 2011

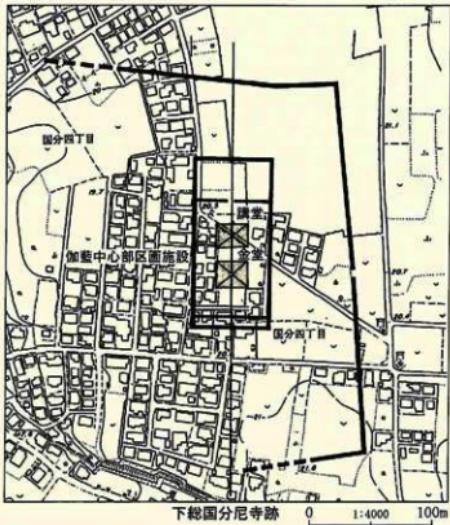
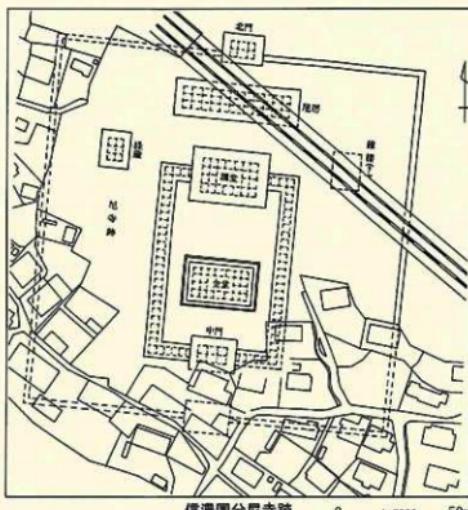
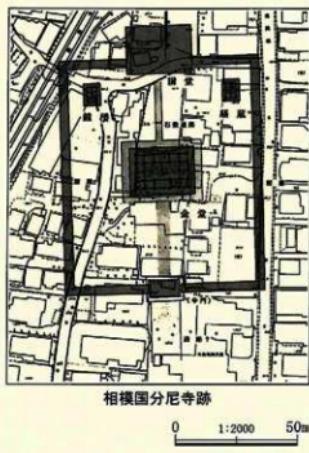
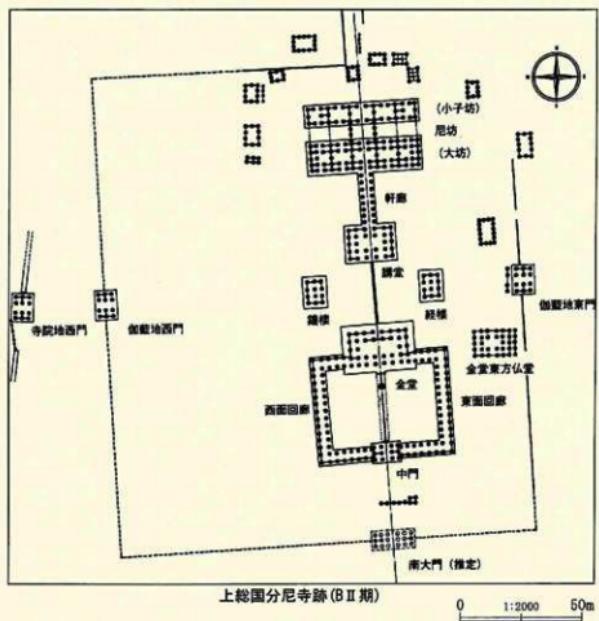
須田 勉・佐藤 信編『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館 2013

(公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター『下野国分尼寺跡II』栃木県教育委員会 2014

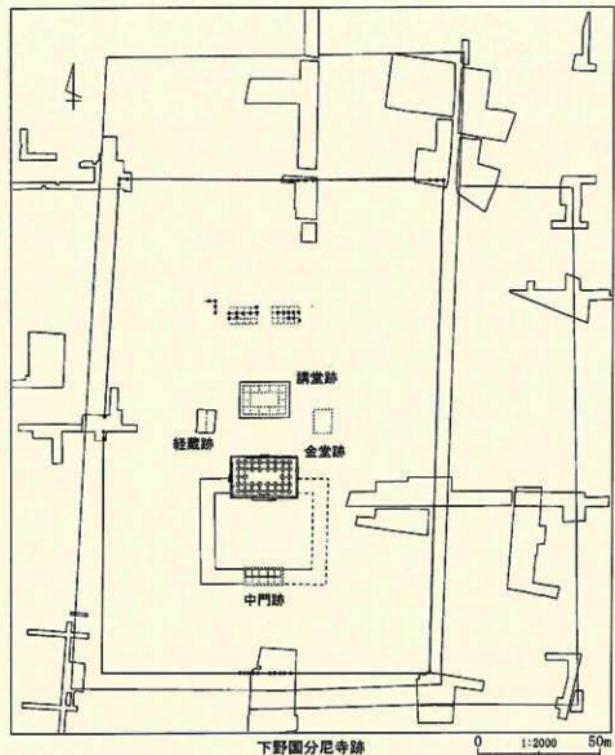
上田市立信濃国分寺資料館『2014企画展 信濃国分寺跡発掘50年』2014

石岡市教育委員会文化振興課『石岡市ふるさと歴史館 第28回企画展 常陸国分尼寺跡』2022





第236図 関東及び周辺の国分尼寺跡



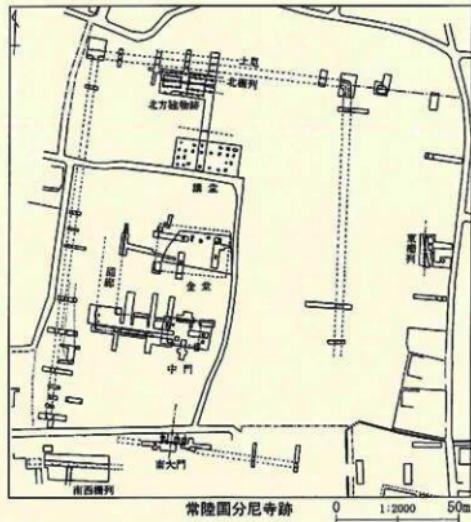
下野國分尼寺跡

0 1:2000 50m



武藏國分尼寺跡 中板部建物配置図

0 1:2000 50m



常陸國分尼寺跡

0 1:2000 50m

第237図 関東及び周辺の国分尼寺跡

## 第2節 上野国分寺との関連

### (1) 規模について

- 1) 伽藍地 上野国分寺(以下僧寺)では、講堂を中心に南北 231.0m(770 尺 : 2町 + 50 尺)・東西 219.0 m(730 尺 : 2町 + 10 尺)で概ね 2町四方となり、尼寺が 1町半四方であるため面積が約 1.9 倍の規模となる。僧寺・尼寺とも伽藍地の区画施設として築垣を廻らす。伽藍中軸線の方位は N-2° -W である。
- 2) 金堂 僧寺金堂の平面規模は、掘込地業の範囲が東西約 28.5m・南北約 19m、建物は推定で桁行 76 尺・梁行 42 尺である。尼寺金堂の掘込地業範囲が東西 26.5m・南北 20.2m、建物が桁行 80 尺・梁行 44 尺と僧寺金堂よりわずかに規模が上回ると推定される。今後、西半部を精査することこれにについて検討していく必要がある。基壇外装には僧寺・尼寺とも凝灰岩切石が用いられている。
- 3) 回廊 梁間 15 尺の單廊で礎石立ち、桁行柱間は 10 尺等間で東西面回廊の中央付近に門の存在が推定される。回廊四隅の柱芯々距離は東西 68.7m(229 尺)・南北 57.9m(193 尺)、基礎は掘込地業で構築される。基壇外装は凝灰岩切石の一級積と推定されている。僧寺・尼寺とも回廊が開む平面形が東西にやや長い矩形という点では一致し、平面規模は僧寺が尼寺の概ね 1.8 倍、梁間は 1 尺分広い。また、掘込地業について、僧寺が基壇幅とほぼ同じくらいの規模であるのに対し、尼寺は礎石周辺のみに限定されるようで、省力化の傾向がみられる。
- 4) 各堂宇の距離 僧寺における堂宇の芯々距離は以下の通りである。  
僧坊(推定) - 25.5m(85 尺) - 講堂 - 39.6m(132 尺) - 金堂 - 57.0m(190 尺) - 中門

僧寺跡北側は広範囲に削平が及び、僧坊痕跡をうかがう資料は調査では確認できず、講堂基壇北縁から 24m(8 尺)ほど北で確認された 9 間の一本柱列(SA01)の南に僧坊が存在したと推定されている。注意されるのは僧寺・尼寺とも僧・尼坊と講堂の距離が近いとみられ、これが上野国分二寺の特徴の一つとみることができる。

### (2) 構築時期及び衰退状況の検討

上野国分寺の創建は『続日本紀』天平勝宝元年(749)の記載から、8世紀中葉には塔・金堂・僧坊の主要堂宇が完成したとされている。一方、考古学的手法から創建年代を導き得る資料としては、塔跡の南南西 56m に位置する掘立柱建物跡(SB12)と重複する堅穴建物跡(SJ24)があげられる。SB12 は 4 間×2 間・二面庇構造で目隠し塀をもち、建物の格式から塔の造営段階に建てられた仮僧坊か政所の可能性が想定され(註 1)、SJ24 は 8世紀前半の構築と判断されるが、国分寺の造営開始に伴い埋められた可能性が指摘される。一方、南辺築垣崩壊後に構築された堅穴建物跡(SJ21・SJ22)は、11世紀初頭の構築と判断され(註 2)、国分寺が衰退していく過程を示すものである。

尼寺では、伽藍地西辺の区画溝(SD1)外側に接して確認された、堅穴建物跡(10-2 トレンチ SI2)は 8世紀前半の構築と判断され、埋土内に地山土ブロックが密にみられ、また埋土上に整地痕跡がみられることから、尼寺造営に伴い埋められたとみられる。また、尼寺伽藍地南辺外側の西半部では、8世紀前半から中葉にかけて堅穴建物が一定のまとまりで存在し(註 3)、尼寺造営に関わる集団の限定的な居住区域であった可能性も考えられる。一方、衰退の過程をうかがう資料として、伽藍地東辺で築垣基部を掘り込む堅穴建物跡(6-2 トレンチ SI1)、伽藍地西辺 SD1 の内側に接して構築される堅穴建物跡(10-2 トレンチ SI1)がみられ、両堅穴建物跡とともにカマド補強材に瓦を用いている。構築時期は前者が 10世紀後半、後者が 9世紀第4四半期から 10世紀初頭と判断される。なお、6-2 トレンチ SI1 は築垣内側の溝状掘込の埋没過程で構築されており、伽藍地の管理体制が衰退していることを示

すものとみられる。

ただし、10-2 トレンチ S11 は西辺区画溝 SD1 の走行方向を意識した配置となっており、伽藍地区画が一定の管理下のもとで機能していたことを示している可能性が有る。

以上から、尼寺も僧寺と同様 8 世紀中葉頃には創建造営に着手されているよう、さほど時期差は無いようにみられる。ただし、各堂宇の竣工時期は別の問題となる。また、尼寺では少なくとも 10 世紀後半には伽藍地区画の規制が形骸化しているよう、僧寺と比べて衰退がより早いことを示している。なお、僧寺では、築垣の崩壊は進んだが、「上野国文書実録帳」の記載や衰退に伴う堅穴建物の構築が伽藍地中央部には見られないことから、塔や金堂は 11 世紀前期には姿を保っており、塔は As-B 層下で崩落した多量の瓦が放置された状態で確認されていることから、12 世紀初頭までには倒壊したとみられ、金堂は 14 世紀には墓地化され完全に廃絶している。

一方、尼寺の金堂及び尼坊の基壇裾付近では、As-B 層下以前となる炭化材や焼土化した壁材の堆積層がみられ、特に尼坊基壇裾では不整な形状の土坑が多発され、炭・焼土・瓦片の廃棄坑としての性格がみられる。このことは、As-B 層下前の 11 世紀代には金堂・尼坊は廃絶し、建築部材を焼却処分していたことを示している。

### (3) 寺院地について

1) 僧寺・尼寺中間地域の居住規制と「東院」 僧寺・尼寺周辺の発掘調査成果は蓄積されつつあるが、寺院地の範囲や付属院地の状況を推定し得る資料は乏しい。そのような中にあって、昭和 45 年(1970)に関越自動車道路建設との調整のため実施された「上野国分二寺中間地域」の調査で、僧寺東方の耕作土中から出土した須恵器杯(9 世紀末)にみられる「東院」の墨書き(第 238 図)は、僧寺の付属院地を知る手掛かりとなっている。その後に実施された「上野国分僧寺・尼寺中間地域」の調査(註 4)で確認された溝区画や周辺堅穴建物の動向から、僧寺・尼寺の間では各々推定伽藍地の南北幅中央付近を横切る位置に存在する溝(C 区第 6 号溝状造構)を境に、北側では 8 世紀中頃あるいは後半から 9 世紀代を通じて居住規制がみられ、南側では 3 期の溝区画が指摘され「東院」と称された施設の存在が推定されている(註 5)。また、「東院」区画の南端部で調査された井戸跡(B 区 1 号井戸跡)から出土した須恵器杯に「法花寺」の墨書きがあった。この墨書き土器は、複数を正位置で重ねた須恵器蓋や土師器蓋の最上位に逆位で置かれ、9 世紀後半頃、尼寺の寺域内で行われた埋納行為によるもの(註 6)とされている。

2) 尼寺南面の東西溝区画 尼寺跡の南面一帯は、土地区画整理事業により平成 11 年(1999)度から継続して調査が実施されており、8 世紀後半では広範囲にわたり居住規制が存在したことが推定されている(註 7)。こうした中で、寺院地を推定するうえで重要とみられる東西方向の溝跡が確認されたが(註 8)、「上野国分僧寺・尼寺中間地域」の A 区第 2 号溝状造構と同一とすれば、牛池川現流路付近まで総延長 630m 以上に及ぶ。同溝跡は上幅 1.5m 前後・深さ 20cm ほどで、「上野国分僧寺・尼寺中間地域」の所見では 8 世紀中頃から後半の間機能していたとされ、また北側にほぼ同規模・同時期の溝跡が並走し、両溝の間隔は各々外縁で計測すると 15m であることから、南側溝の道と想定されている(註 9)。

今回、僧寺・尼寺の伽藍及び周辺での調査成果について総括的な検討を試行した(第 240 図)。僧寺伽藍中軸線を A(N-2° -W)、尼寺伽藍中軸線を B(N-1° 27' -E)、尼寺南面の東西溝跡が僧寺南面に伸びることを推定し、南側溝跡 C1・北側溝跡 C2(N-86° -E) として各々位置関係を検討したところ、僧寺・尼寺の金堂中心と C1 との距離は、僧寺が約 163.5m(約 545 尺)、尼寺が約 157.5m(約 525 尺)で両

者とも概ね 1 町半に近い数値となり、僧寺・尼寺伽藍配置と南面溝とが関連している可能性が推定された。また、A・B の延長線と C1 接点との距離は約 546m(5 町 20 尺)で、僧寺南面にあたる染谷川対岸の元總社西川遺跡で確認された 4 号構(上幅約 1.1m・深さ 37cm、8 世紀中頃の構築で As-B 降下前に廃絶)(註 10)の走行軸を北に延長すると南大門基壇東辺付近に重なるが、同溝跡走行軸と C1 との接点との距離はほぼ 540m で 5 町となることは注意され、染谷川南方に僧寺の寺院地が広がる可能性を示している(註 11)。なお、C1 の北側は尼寺寺院地の範囲内と思われるが、溝跡が 8 世紀代で廃絶しているとすれば、9 世紀以降に寺院地区画の変更があり役割を終えたのであろう。ただ、尼寺南面の東西溝区画は道としての機能とあわせ、僧寺・尼寺の伽藍創建時の設計基準線となっていたとも推定できる。僧寺・尼寺の伽藍は染谷川支谷弁天谷と牛池川に挟まれた東西幅 1 km に満たない台地上に広大な伽藍を並置しており、綿密な設計構想がなければ困難であることから、計画地を横断する基準線を設定していた可能性も考えられる。なお、「法花寺」墨書き土器出土の井戸跡は、A・B と C1 接点間距離の中間よりわずか尼寺側に位置し、尼寺の寺院地西限を示す可能性が推定される。

- 3) 僧寺跡「瓦組造構」との関連 僧寺跡第 2 期発掘調査の際、東大門跡推定箇所の南約 16m で、完形の平瓦 4 枚を円形に組んだ瓦組造構が確認され(第 239 図)、僧寺に関連する施設が推定されたが性格は不明であった(註 12)。今回、尼寺跡の西門推定箇所付近で環状に加工された礎の埋設が確認されたため、瓦組造構との位置関係を調べたところ。両者をつなぐ軸線は E=0° 31' -N で、僧寺・尼寺中間地域で「東院」区画に関連する C 区第 10 号構造遺構と概ね重なることが判明した。このことから、瓦組造構と加工礎は互いに関連した施設で、僧寺と尼寺間の連絡通路の存在を示す遺構の可能性もある。
- 4) 今後の課題 「上野国交替実録帳」には僧寺の「大衆院」について記載が見られるが、僧寺・尼寺周辺の発掘調査資料から付属院地の場所や具体的な施設の状況に結び付けることは、現時点では困難である。今後は調査成果の検討を進めるとともに、尼寺については寺院地の範囲や核施設の痕跡を探るため確認調査を継続して実施していく必要がある。

註 1 a 前澤和之・高井佳弘「第 3 上野」『新修国分寺の研究 第 3 東山道と北陸道』吉川弘文館 1991

b 須田 勉「国分寺造営の諸段階—考古学から—」『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館 2013

註 2 註 1a と同じ

註 3 a 『元総社蒼海遺跡群(20)』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009

b 『元総社蒼海遺跡群(26)』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010

註 4 a 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)』群馬県教育委員会(財)埋蔵文化財調査事業団 1990

b 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(5)』群馬県教育委員会(財)埋蔵文化財調査事業団 1991

註 5 a 木津博明「上野国分寺」『関東の国分寺』関東古瓦研究会 1994

b 桜岡正信・闇口功一「関東古代寺院の付属施設に関する一考察—上野国分寺周辺を中心にして—」『群馬考古学手帳』11 群馬土器観会 2001

c 桜岡正信・闇口功一「上野国分寺「東院」について」『群馬考古学手帳』13 群馬土器観会 2003

註 6 木津博明「上野国分尼寺々地考」『群馬の考古学』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988

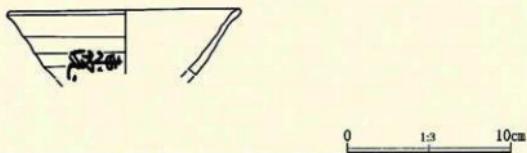
註 7 (有)毛野考古学研究所『元総社蒼海遺跡群(93 街区)』前橋市教育委員会 2016

註 8 a 『小見内Ⅲ遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2002

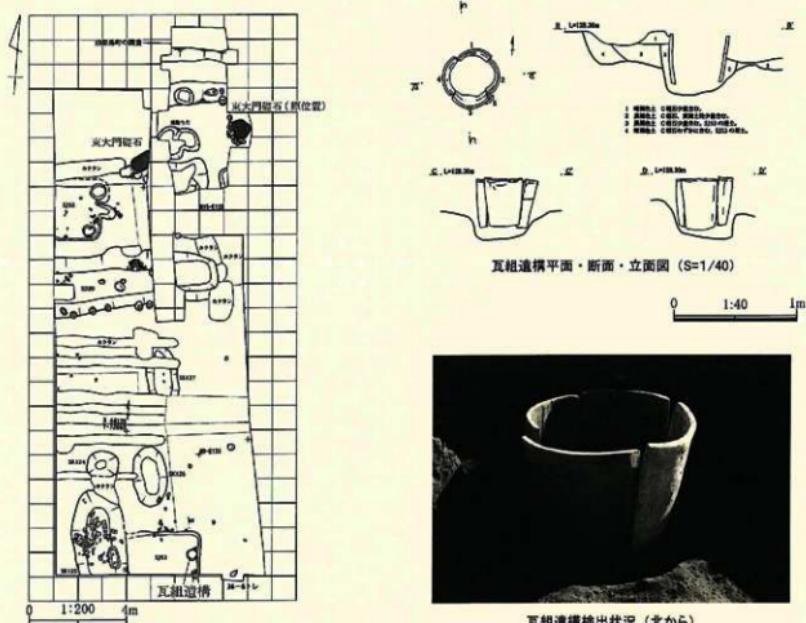
b 『元総社小見内Ⅶ遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2004

c 『元総社蒼海遺跡群(1)』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2006

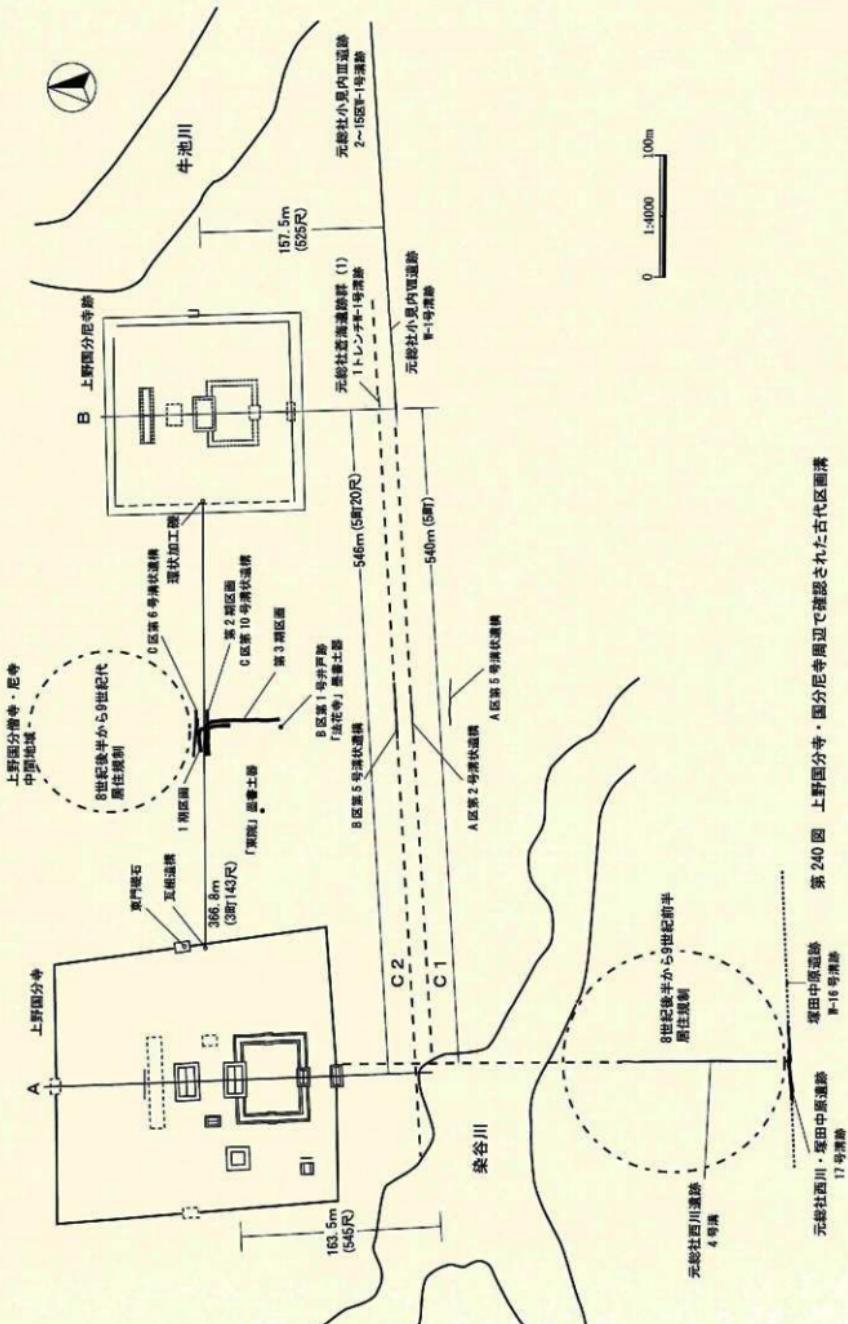
- 註 9 註 4b 文獻に同じ
- 註 10 『元總社西川遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001
- 註 11 元總社西川遺跡調査者の佐沢泰史氏は、僧寺南大門から南 3 町の位置に近年まで存在した地割までを僧寺南正面とし、竪穴建物跡の構築が 8 世紀後半から 9 世紀前半は無く、圓分寺造営に関連した無住空間の存在を推定している。その後地割の南で調査された元總社西川・塙田中原遺跡で東西方向の区画溝(17 号溝)が確認されている。17 号溝は上幅 2~4m、深さ 0.6~1.6m で 9 世紀前半～中葉に機能していたと推定される。(『元總社西川・塙田中原遺跡』(財)埋蔵文化財調査事業団 2003)
- 註 12 『史跡上野国國分寺跡第 2 期発掘調査報告書－総括編－』群馬県教育委員会 2018



第238図 上野国國分寺中間地域の調査で確認された「東院」墨書き土器  
『上野国國分尼寺 上野国國分寺中間地域』群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993



第239図 上野国國分寺東大門南側で確認された瓦組遺構『史跡上野国國分寺跡第2期発掘調査報告書－総括編－』群馬県教育委員会 2018



### 第3節 尼寺出土の瓦について

(1) 整理の方針 今回出土した瓦を整理するにあたっては、上野国分尼寺跡調査検討委員会における助言・指導を基に、以下の3点を留意して行った。

1 尼寺跡で確認された各堂宇で使用された瓦について、堂宇ごとの特徴や異同を認めることができることか。

2 今回の発掘調査で出土した瓦と僧寺跡出土の瓦との比較検討をすること。

3 前2点の分析をとおして、尼寺の創建時期・廃絶時期を知ることができるか。

上記の3点を中心に把握するため、瓦の特徴をつかむことができ、生産及び使用時期のほか产地も確認できる情報を含んでいる軒平瓦・軒丸瓦を中心に詳細な観察を行った。

僧寺跡においてはこれまで2期の調査が実施され、その際に出土した軒先瓦の瓦当文様について詳細な分類がなされている(註1)。そのことから、今回尼寺跡の調査で出土した軒先瓦の整理・観察にあたっては、僧寺跡の発掘調査報告書で付された分類番号のどれに該当するのかを検討し、明らかにするよう努めた。

しかし、二寺跡出土の軒先瓦は、僧寺跡の報告で触れられているように、瓦当文様は範種が多く、それぞれで類似しているものが多い。そのため、今回の整理作業で判別したものの中には、別の分類番号(範種)に該当するものも含まれている可能性がある。

(2) 新範種の軒先瓦 今回の調査で出土した軒先瓦を分析したところ、2期にわたった僧寺跡の発掘調査で出土していない瓦当文様のものがあった。それらを「新範種」としたが、それは必ずしも新たに瓦当文様ではなく、他の遺跡では報告されているが僧寺跡の第1期・第2期の調査報告書に掲載されていない文様をもつ軒先瓦も含めている。これらの新範種と設定した軒先瓦には、僧寺跡の分類に準じて瓦当文様に分類番号を付した(註2)。その際、尼寺跡からの出土であることを明確にするため、分類番号の第1文字目アルファベットを小文字で表し、それ以下の数字は僧寺跡からの連続番号を付している。

なお、尼寺跡は昭和40年代に2度にわたって発掘調査(以下「昭和期の調査」という)が実施され、その成果が既に報告されている(註3)。昭和期の調査では、今回の調査で出土しなかった瓦当文様の軒先瓦であることから、その成果も反映している。

#### 1) 軒平瓦

①鋸歯文(u002 瓦68・265・494) 3片出土。



拓本重ね図(網掛けは註4による)

界線は沈線により1本あり、内区は2本の鋸歯文が範により陰刻されている。範の形と瓦当面の大きさが一致していない。昭和期の調査で出土したほか、住谷コレクション(註4)には瓦当面の完形品がある。左図のとおり、範の上端にある界線と鋸歯文が一致することから、同範であることがわかる。

②左偏行唐草文(p108 瓦26) 1片出土。



文様は、内区の中央に上下を2分するように横長の陰線があり、そこから上下にS字状に退化した唐草文が界線までつながる。中央の稜線より上段は左方向、下段は右方向に膨らみ、上下で対称形となっている。僧寺跡を含めた近隣の遺跡では出土していない範種である。

③変形唐草文(w002 瓦200) 1片出土。



瓦当面の右側のみ残存。手描きによる文様・界線ともすべて沈線による。文様は中心軸から左右に蔓手状に描かれ、瓦当面中央部は出土例がないが、左右で対になっている可能性がある。住谷コレクションにもあり、唐草文が左右対である点は同じだが、横方向の短い傷状の沈線の違いなどから手描きの可能性を示している。

拓本下段は住谷コレクション

2) 軒丸瓦

①単弁四葉、子葉あり、蓮子1(a006 瓦37・292) 2片出土。

僧寺跡A105に類似しているが、蓮子の数、界線の形状が異なる。界線が太くその外側に周縁を区画する上幅1ミリの溝が回っている。中房は圓線があり、蓮子は中央に1個。四葉のうち一葉だけ弁が大きく先端が界線と一体となっている。他の三葉のうち一葉の弁先から界線に繋がる範囲がある。中間地域の調査(註5)



a006



中間地域(7)  
図408を改変



尼寺昭和  
第45図を改変  
a311

で同文様のものが出土しており同范の可能性が高い。なお、昭和期の調査(註6 図中は「尼寺昭和」と表記)で似た文様のものが出土しているが、界線は細い隆線で、中房は十字状であり本品とは異なっている(後出 a311)。

②単弁四葉、子葉及び蓮子不明(a007 瓦395) 1片出土。

手描きによる一重の蓮弁と界線1本。中房内の文様構成は不明。瓦当裏面に突帯ではなく、ナデ調整。やや不整形だが復元径20センチと大型。



③単弁四葉、子葉あり、蓮子1+4(a108 瓦488) 1片出土。

中房圓線が二重、蓮子は1+4。周縁は瓦当の縁になり、その内側に界線が1本回り、界線から中房に向かって棒状の間弁がある。弁形は先端が尖り、やや丸みを持った三角形、子葉はしっかりと厚みのある先端の尖った三角形をしている。瓦当の直径より丸瓦の径は小さく、接着技法または差し込み技法(A技法)であることがわかる。この瓦は、僧寺跡の第1期調査より以前の昭和50年(1975)に実施された発掘調査(註7)の際に、南大門付近のトレーナーでAs-B降下以前の土層中から弁一葉分の小破片が出土しており、同范と認められる。



④単弁五葉、子葉なし、蓮子1+5(b211 瓦28・180) 3片出土。

しっかりとした隆線で先端の尖った細い花弁五葉、子葉はなく界線1本。中房は圓線1本で中に蓮子1+5である。昭和期の調査、中間地域の発掘調査(註8)でも出土している。二寺跡で多くの出土例がある五葉の軒丸瓦B201やB207などの花弁の割り付けは均等であるが、それらと比べると雰囲気である。



b 211



中間地域(4)



尼寺昭和

⑤単弁十四葉、子葉あり(h003 瓦330) 1片出土。

中房に蓮子と「大」が陽刻され、花弁は複弁のような形の単弁である。

これらの特徴から下野国分寺跡の「鉢瓦11型式」と同范(単弁十四葉)と

認められ、9世紀第2四半期に比定されている。なお、この瓦は下野国分寺跡の「複弁八葉鉢



瓦15型式」(僧寺跡K001)の瓦筋を彫り直したものであることが報告されている(註9)。

以上が今回の調査で出土した軒先瓦の中で新筋種に設定できたものだが、小破片のため判別できないものも多数あることは前述のとおりである。このほか、今回の調査で出土した軒先瓦で特記するものがある。

・軒平瓦P001

瓦304・305・307は瓦当面左下隅界線から珠文にかけ範傷があり、瓦319・335には瓦当面右隅上下に界線から珠文にかけ範傷がある。瓦当面すべてがわかる例が今回は出土しなかったため、左右に残る範傷がどちらから先にできたかは不明である。

・軒丸瓦A101

僧寺跡でも複数出土しているこの軒丸瓦では、瓦当面に花弁を貫く範傷(瓦163)があることが知られていた。しかし、今回の調査では瓦当面に全く傷のないもの(瓦94)が出土した。このことは、必ずしも補修用瓦が優先的に僧寺への供給から始められたとは言えないことを示している。

・軒丸瓦B201

台之原廃寺跡(註10)から出土した同筋の軒丸瓦は丸瓦部分が有段式であるが、尼寺跡出土の軒丸瓦(瓦317)は無段式である。本例では瓦当背面に突部がなく、丁寧なナデ調整が施され、横置き一本づくりと思われるが、他の例(瓦352)も含め瓦当面成形の際の粘土の積み上げ痕は確認できない。割れ方も瓦当面に対して水平方向ではなく垂直方向である。瓦317は丸瓦頂部の瓦当面際から縦方向に半分ほどのところまで、両側から粘土を寄せて丸瓦を製作した痕跡がある。これは、一枚の粘土板を製作台に巻くか乗せるかしたときに、台の径よりも余った粘土板を切断してから貼り合わせたものとみられる(PL. 35 62)。

### (3) 出土した軒平瓦・軒丸瓦の種類と数量

今回の調査で出土した軒先瓦の種類と数量は次のとおりである。

本書での文様分類は、前述(第4章第2節)のとおり僧寺跡の2期にわたる成果を使用している。しかし、僧寺跡でも報告されているように、上野国分寺式軒先瓦の文様は極めて類似したものが多種に及んでいること、出土した瓦が小破片であることなどから文様判別が困難なものも多い。そのため分類ごとの数量には今後修正が必要な場合もあるが、僧寺跡で創建用(創建初期も含む)に用いられた数種類の軒先瓦と、それ以降の補修用に用いられたものとの混同することは少ないと考え、以下の分類別箇数をまとめた。また、本文中に(尼寺昭和)とあるものは、昭和期の尼寺跡の調査報告書(註11)に記載された内容である。なお、挿図の縮尺は任意で、出典がないものは今回調査の出土瓦である。

1) 軒平瓦 今回出土した軒平瓦のうち106片について文様分類することができ、さらに昭和期の調査結果も加えた数量は以下のようになる。

・NH301及びNH3系 計9片。 今回の調査では9片出土。 昭和期の調査では出土なし。



図は佐谷コレクション

今回出土した9片のうち1片が8-3Nトレンチ(旧廊南東隅)の地業内出土。

三重廓文。 僧寺では七重塔で主に使用されている。

僧寺跡ではP001に次いで出土量が多いが、尼寺跡では出土量が少ない。

生産地は吉井・藤岡古窯跡群。

・P001 計45片。 今回の調査では39片出土。 昭和期の調査では6片出土。



図は佐谷コレクション

今回の調査では1・2・7・12トレンチからの出土はなかったが、出土場所に大きな偏りはない。昭和期の調査では推定中門跡から4片、尼坊跡(旧講堂跡)から2片。二寺跡で最も多く出土した上野国分寺創建意匠始まりの軒平瓦。右側行唐草文。左端に双葉状の支葉が付き、主葉と支葉が10単位。外区に珠文。有馬庵寺跡・台之原廃寺跡・寺井廃寺跡などでも出土。生産地は笠懸庵ノ川窯。

- P002 計23片。今回の調査では堅穴建物埋土中も含め19片出土。6-2WトレンチのSI1、SI2では竪の補強材として使用されていた。昭和期の調査では推定中門跡などから4片。P001に次いで出土量の多い軒平瓦。右偏行唐草文。主葉と支葉が11単位。途中で筋の彫り直しがある。外区に痕跡程度の珠文。寺井廃寺跡、上植木廃寺跡、十三宝塚遺跡などでも出土。  
生産地は笠懸山際窯。

- P003 計4片。今回の調査では3片出土。昭和期の調査では1片出土。  
右偏行唐草文。主葉と支葉が界線から生じている。主葉と支葉が17単位。主葉の長さに比べ巻込みが小さい。P008とよく似ており、分類判別を混同している可能性もあるがP008は主葉と支葉が13単位なので異なる。  
生産地は吉井・藤岡古窯跡群(尼寺昭和)。

- P004 計4片。今回の調査では4片出土。昭和期の調査では出土なし。  
右偏行唐草文。主葉と支葉が10単位。支葉にも巻込みがある。界線が2本。  
生産地は藤岡金山2号窯。

- P006 計1片。今回の調査では出土なし。昭和期の調査では1片出土。  
右偏行唐草文。1本の主葉に左右各1本の支葉がある。主葉と支葉が10単位。  
生産地は吉井古窯跡群(尼寺昭和)。

- P008 計5片。今回の調査では5片出土。昭和期の調査では出土なし。  
右偏行唐草文。主葉と支葉が界線から生じている。  
主葉と支葉が13単位。界線が2本。P003とよく似るが、P003は主葉と支葉が17単位なので異なる。生産地は吉井・藤岡古窯跡群の可能性。

- P009 計2片。今回の調査では2片出土。昭和期の調査では出土なし。  
右偏行唐草文。単位数は不明。P005とよく似る。  
生産地は不明。

- P010 計6片。今回の調査では4片出土。1片は8-1Nトレンチ(回廊南面)の地業内から出土したが、当該調査個所は現地表が薄く搅乱を受けているため、混入の可能性もある。昭和期の調査で2片出土。右偏行唐草文。単位数不明。主葉と支葉が反転する部分あり。界線が2本。  
生産地は藤岡古窯跡群(尼寺昭和)。

- P101 計2片。今回の調査では2片出土。昭和期の調査では出土なし。  
左偏行唐草文。主葉と支葉が10単位。外区の上下に6個ずつ珠文がある。  
生産地は吉井・藤岡古窯跡群の可能性。

- P102 計1片。今回の調査では1片出土。昭和期の調査では出土なし。  
左偏行唐草文。主葉と支葉が9単位。外区の上下に6個ずつ珠文あり。  
生産地は吉井・藤岡古窯跡群の可能性。

図は佐谷コレクション

- P103 計2片。 今回の調査では2片出土。昭和期の調査では出土なし。  
  
 左偏行唐草文の退化したものか。釣り針状の主葉のみ8単位。  
 生産地は吉井・藤岡古窯跡群。
- P104 計1片。 今回の調査では出土なし。昭和期の調査では1片出土。  
  
図は註1a  
 左偏行唐草文。主葉と支葉が対になって連続している。主葉と支葉は少なくとも12単位。  
 生産地は藤岡古窯跡群(尼寺昭和)。
- P201 計1片。 今回の調査では1片出土。昭和期の調査では出土なし。  
  
図は住谷コレクション  
 麻箪形中心飾りのある均整唐草文。  
 山王廃寺跡からも出土。  
 生産地は吉井古窯跡群(尼寺昭和の中間地域)。
- P301 計2片。 今回の調査では出土なし。昭和期の調査では2片出土。  
  
図は註3  
 変形唐草文。  
 生産地は秋間古窯跡群(尼寺昭和)。
- P302 計2片。 今回の調査では南面回廊跡表土中から1片出土。昭和期の調査では南面回廊跡に近接したS6トレンチから1片出土。  
  
図は住谷コレクション  
 方向の異なる唐草が1葉ずつ1組になる。単位数不明。  
 生産地は藤岡古窯跡群(尼寺昭和)。
- P304 計2片。 今回の調査では出土なし。昭和期の調査では2片出土。  
  
図は註3  
 1つひとつの唐草の単位が直立したような文様。主葉と支葉が1組になっている。単位数不明。主葉の巻込む向きが異なる破片があり、異範の可能性もある。界線が2本。  
 生産地は笠懸古窯跡群か藤岡古窯跡群(尼寺昭和)。
- P307 計2片。 今回の調査では1片出土。昭和期の調査では1片出土。  
  
図は註1a  
 釣り針状の文様が連続する。界線が1本。  
 生産地は吉井古窯跡群(尼寺昭和)。
- Q001 計3片。 今回の調査では3片。昭和期の調査では出土なし。  
  
図は住谷コレクション  
 左右から中央に向う飛雲文。  
 上植木廃寺跡からも出土。  
 生産地は笠懸古窯跡群または間野谷古窯跡(註12)。
- R003 計3片。 今回の調査では1片出土。昭和期の調査ではほぼ完形のものが南面回廊跡に近接したS6トレンチから2個体出土。  
  
図は註3  
 5単位の流水文。界線が2本。  
 生産地は吉井古窯跡群(尼寺昭和)。

- ・Z003 計1片。 今回の調査では1片出土。昭和期の調査では出土なし。  
  
 素面にボタン状の突起がある。僧寺跡では範による施文。尼寺跡出土例は貼り付け。生産地は不明。
- ・Z008 計2片。 今回の調査では2片出土。昭和期の調査では出土なし。  
  
 瓦当面が無文のもの。  
 生産地は吉井古窯跡群の可能性。
- ・u002 計4片。 今回の調査では3片出土。昭和期の調査では1片出土。僧寺跡にはなし。  
  
 範による二重巻き文。住谷コレクションにあり。僧寺跡にはなし。  
 生産地は笠懸古窯跡群または藤岡古窯跡群(尼寺昭和)。
- ・p108 計1片。 今回の調査では1片出土。昭和期の調査では出土なし。僧寺跡を含め近隣の遺跡での出土例なし。  
  
 生産地は笠懸古窯跡群の可能性。
- ・u107 計1片。 今回の調査では出土なし。昭和期の調査では1片出土。僧寺跡にはなし。  
  
 山王庵寺跡でも出土(2~5期)。手描きによる鋸歯文と輪状文。  
 生産地は秋間古窯跡群(尼寺昭和)。  
図は註3
- ・w002 計1片。 今回の調査では1片出土。昭和期の調査では出土なし。僧寺跡にはなし。  
  
 住谷コレクションにあり。文様はヘラ状工具による手描き。  
 生産地は笠懸古窯跡群の可能性。

以上のように、これまでに尼寺跡から出土した軒平瓦で文様分類が判明したものは26種類あり、そのうち22種類が今回の調査で確認できた。このほか、分類判別が確定できない小破片が約10片出土している。

2) 軒丸瓦 今回出土した軒丸瓦のうち133片について文様分類することができ、昭和期の調査結果も加えた数量は以下のようになる。

- ・A001 計1片。 今回の調査では出土なし。昭和期の調査では1片出土。  
  
 木の葉状の蓮弁四葉、棒状の子葉あり。中房圓線1本、蓮子1。弁間に1つだけ向きが異なる括弧形の間弁。上植木庵寺跡からも出土。  
 生産地は藤岡古窯跡群(尼寺昭和)。  
図は註3
- ・A004 計1片。 今回の調査では1片出土。昭和期の調査では出土なし。  
  
 細長い三角形に子葉のある花弁四葉と子葉のない三角形の間弁。間弁の先に弧状の弁間文が付く。界線2本。中房圓線2本、蓮子1。  
 生産地は秋間東谷津窯(註13)。
- ・A101 計7片。 今回の調査では4片出土。昭和期の調査では3片出土。  
  
 二重花弁四葉。子葉あり。界線1本。中房圓線1本、蓮子1+4。  
 無絞り布目。突帯あり。生産地は吉井古窯跡群。
- ・A102 計1片。 今回の調査では1片出土。昭和期の調査では出土なし。  
  
 三重花弁と四重花弁が混合した四葉。子葉あり。界線1本。中房圓線1本、蓮子1+4。無絞り布目。  
 生産地は吉井・藤岡古窯跡群。  
図は住谷コレクション

- ・A106 計5片。 今回の調査では5片出土。昭和期の調査では出土なし。



二重花弁四葉。子葉なし。界線1本。中房圓線1本、蓮子1+4。  
無絞り布目。突帶あり。  
生産地は吉井・藤岡古窯跡群。

- ・A107 計2片。 今回の調査では2片出土。昭和期の調査では出土なし。



弁間が高く、陰刻による弁先の丸い二重花弁四葉。子葉は隆線。  
中房は円形に窪み、蓮子1+4。界線1本。無絞り布目。突帶あり。  
生産地は吉井・藤岡古窯跡群。

- ・B001 計10片。 今回の調査では9片出土。昭和期の調査では1片出土。



二重花弁五葉。子葉のあるものとないものが混在。弁間に珠文。弁と弁を繋ぐ隆線あり。界線1本。新しいものは弁を貫く範傷があり、瓦当面裏に布目痕あり。今回の調査では、範傷のあるものとないものが出土。錦貢廐跡・唐松庵寺跡など西毛の櫟名山南麓で出土。生産地は秋間古窯跡群。

- ・B101 計8片。 今回の調査では5片出土。昭和期の調査では3片出土しうち2片は東門トレンチ。



二重花弁五葉。子葉あり。界線1本。中房圓線1、蓮子1+4。膨らみのない先細りの花弁。無絞り布目、一部布目痕が二重。突帶あり。  
生産地は笠懸山際窯。

図は住谷コレクション

- ・B102 計3片。 今回の調査では2片出土。昭和期の調査では1片出土。



二重花弁五葉。子葉あり。界線1本。中房圓線1本、蓮子1+4。  
瓦当面直径約20cm。無絞り布目。上植木庵寺跡・清里陣馬遺跡で出土。  
生産地は笠懸山際窯。

- ・B103 計5片。 今回の調査では4片出土。昭和期の調査では1片出土。



二重花弁五葉。やや太い子葉あり。界線1本。中房圓線1本、蓮子1+4。  
無絞り布目。突帶あり。瓦当周縁及び丸瓦部に平行条目の叩き。  
山王庵寺で出土。生産地は吉井・藤岡古窯跡群(尼寺昭和)。

- ・B104 計5片。 今回の調査では4片出土。昭和期の調査では1片出土。



弁先が尖り、あまり膨らまない一重花弁五葉。  
界線1本。中房圓線1本、蓮子1+4。  
生産地は吉井古窯跡群(尼寺昭和)。

図は註3

- ・B105 計7片。 今回の調査では5片出土。昭和期の調査では2片出土。



界線の無い中房から太さが変わらずに伸びて先端が丸い二重花弁五葉。  
長さに比して太い子葉。界線1本。中房はなく、蓮子1+4。白倉下原・天引向原遺跡ほかで出土。生産地は吉井古窯跡群(尼寺昭和)。

図は註3

- ・B201 計22片。 今回の調査では22片出土。昭和期の調査では出土なし。



上野国分寺創建のための統一意匠の始まり。弁先の手前で丸みをもち、尖った先端が反る二重花弁五葉。子葉あり。界線1本。中房圓線1本、蓮子1+5。瓦当裏面がナデ調整のものと無絞り布目痕のものがある。寺井廃寺跡・台之原廃寺跡・源六塚遺跡等現利根川以東各所のほか、有馬廃寺跡で出土。生産地は笠懸鹿ノ川窯。

- ・B202 計2片。 今回の調査では2片出土。昭和期の調査では出土なし。



B201に似るが、弁の丸みが弱くなる二重花弁五葉。子葉あり。界線1本。中房圓線1本、蓮子1+5。瓦当裏面がナデ調整、有絞り布目痕、無絞り布目痕のものがある。

生産地は笠懸古窯跡群の可能性。

図は住谷コレクション

- ・B203 計1片。 今回の調査では出土なし。昭和期の調査では1片出土。



図は註3

弁が細長い二重花弁五葉。子葉あり。

界線1本。中房圓線1本、蓮子1+5。上植木廃寺跡でも出土。

生産地は笠懸山際窯。

- ・B205 計6片。 今回の調査では5片出土。昭和期の調査では1片出土。



図は註3

花弁が小さい二重花弁五葉。子葉あり。界線1本。中房圓線1本、蓮子1+5。

上植木廃寺跡でも出土。

生産地は笠懸山際窯。

- ・B207 計4片。 今回の調査では3片出土。昭和期の調査では1片出土。



図は註3

全体的に丸みがあり、あまり高くない陣線による二重花弁五葉。

子葉あり。界線1本。中房圓線1本、蓮子1+4。

生産地は藤岡金山2号窯。

- ・B208 計2片。 今回の調査では出土なし。昭和期の調査では2片出土。



図は註3

低く太い二重花弁五葉。子葉あり。界線1本。中房圓線1本、蓮子1+4。

生産地は笠懸古窯跡群。

- ・C002 計2片。 今回の調査では2片出土。昭和期の調査では出土なし。



図は住谷コレクション

弁間が高く、弁の形をした一段低い瘤みの中に隆線の二重花弁六葉。

子葉なし。界線なし。中房は二重の円弧、蓮子なし。

生産地は不明。

- ・C003 計1片。 今回の調査では出土なし。昭和期の調査では1片出土。



図は註3

大きく歪んだ一重花弁六葉。子葉あり。界線1本。中房圓線1本、蓮子1。

生産地は吉井古窯跡群(尼寺昭和)。

- ・ D001 計2片。 今回の調査では1片出土。昭和期の調査では1片出土。  
  
 図は註3
- ・ E103 計7片。 今回の調査では7片出土。昭和期の調査では出土なし。  
  
 図は註3
- ・ E202 計3片。 今回の調査では3片出土。昭和期の調査では出土なし。  
  
 図は註3
- ・ F001 計1片。 今回の調査では1片出土。昭和期の調査では出土なし。  
  
 図は註3
- ・ J001 計1片。 今回の調査では1片出土。昭和期の調査では出土なし。  
  
 図は註3a
- ・ M002 計37片。 今回の調査では36片出土。尼坊跡・南面回廊跡・西面回廊跡・東面回廊跡に多く、金堂跡からも出土。昭和期の調査では1片出土。  
  
 図は註3
- ・ a006 計2片。 今回の調査では2片出土。昭和期の調査では出土なし。僧寺跡にはなし。新出。  
  
 不揃いな形の一重花弁四葉。子葉あり。幅の太い界線1本。中房圓線1本、蓮子1。  
 新出。中間地域で同范と思われるもの出土。  
 生産地は吉井・藤岡古窯跡群の可能性。
- ・ a007 計1片。 今回の調査では1片出土。昭和期の調査では出土なし。僧寺跡にはなし。新出。  
  
 手書きによる。界線ではなく平坦。詳細不明。  
 生産地は不明。
- ・ a008 計1片。 今回の調査では出土なし。昭和期の調査では1片出土。僧寺跡にはなし。新出。  
  
 先端の尖った陰刻の二重花弁四葉。沈線による界線1本。中房圓線1本、蓮子1。  
 生産地は藤岡古窯跡群(尼寺昭和)。
- ・ a108 計1片。 今回の調査では1片出土。昭和期の調査では出土なし。僧寺跡にはなし。新出。  
  
 三角の一重花弁四葉。子葉あり。界線1本。中房圓線2本、蓮子1+4。  
 陰線によるT字状間弁が弁先で繋がる。僧寺跡(南大門付近)でも出土。  
 生産地は観音山丘陵古窯跡群の可能性。

- a 311 計2片。 今回の調査では出土なし。昭和期の調査では2片出土。僧寺跡にはなし。



図は註3

- b211 計4片。 今回の調査では3片出土。昭和期の調査では1片出土。僧寺跡にはなし。新出。



丸味をもった花弁四葉。子葉あり。界線は1本。中房圓線1本、中に十字状の隆線。

生産地は吉井古窯跡群(尼寺昭和)。

- h 003 計1片。 今回の調査では1片出土。昭和期の調査では出土なし。僧寺跡にはなし。新出。



図は註10

細く尖った二重花弁五葉。子葉なし。界線1本。中房圓線1本、蓮子1+5。

中間地域でも出土。生産地は吉井・藤岡古窯跡群の可能性。

※ 尼寺昭和では笠懸古窯跡群とある。

- h 003 計1片。 今回の調査では1片出土。昭和期の調査では出土なし。僧寺跡にはなし。新出。

単弁十四葉。界線が1本。中房内に蓮子のほかに「大」字。下野国分寺跡出土の鏡瓦11型式。9世紀第2四半期に比定されている。僧寺跡では「大」が彫られる前の下野国分寺跡鏡瓦15型式が1片出土(K001)。

以上、軒丸瓦で文様分類が判明したものは33種類あり、そのうち27種類が今回の調査で確認できた。このほか、分類判別が確定できない小破片が約100片あった。

瓦当文様の分類の結果、尼寺の軒平瓦ではNH301・P001・P002が、軒丸瓦ではB201・M002が多いことがわかる。ただし、小破片の中にはB201あるいはB202と思われるものも複数あったことから、B201も含めB202の数量が他の軒丸瓦より多いことが推測できる。

瓦当文様分類	尼寺跡	僧寺跡
軒平瓦	総数 130 片	1,702 片
	P001 34%	22%
	NH301 系 7%	19%
	P002 18%	10%
軒丸瓦	総数 158 片	1,650 片
	B201 14%	21%
	B101 5%	7%
	E103 4%	14%

表5 二寺主要軒平瓦・軒丸瓦出土比率  
(尼寺のデータは昭和期の調査を含み、僧寺のデータは註1bから引用。)

表5は、僧寺跡において出現割合(個体数)の多いもの上位3種について尼寺跡との比較をしたものである。なお、M002は周縁・花弁・珠文の形状が他の軒丸瓦と混同することのない極めて特徴的な形態をしており、他の軒丸瓦に比して判別が容易であることから表5には含めていない。しかし、僧寺跡の2期にわたる発掘調査で出土した点数は18片(1%)であり、尼寺跡の出土数は37片(28%)である。

このほか昭和期の調査において、今回の調査と僧寺跡の調査で出土していない文様の軒平瓦・軒丸瓦があり、尼寺跡出土の軒先瓦の範種(文様)はさらに増えることが確認されている。

#### (4) 各堂宇における出土瓦の傾向

今回の調査で出土した軒先瓦の他の瓦も含め、特徴的と考えられる点は以下のとおりである。

①隅切り瓦は金堂・回廊跡などから複数片出土したが、尼坊跡周辺からは1片も出土しなかった。

②軒平瓦はP001が昭和期の調査を含め45片(以下同じ)、P002が23片・NH301系が9片で、他の文様のものは1、2片のものが多かった。

③NH301は尼坊跡・南面回廊跡などから数片出土したが、ほかに南面回廊跡の基壇地業内から1片出土している(右図)。



NH301

④P001は広範囲から出土しているが、主な場所は尼坊跡から5片、南面回廊跡からの4片(うち2片が地業内)、西面回廊跡から3片、伽藍地北辺築垣の内側から4片出土した。

- ⑤P002はP001と同じく複数の建物跡から出土し、南面回廊跡および西面回廊からそれぞれ3片、伽藍地北東隅から2片出土した。
- ⑥軒丸瓦はB201が22片、E103が7片、M002が37片、他にB001が10片出土し、他の文様のものは少量であった。
- ⑦B201は22片のうち尼坊跡から3片、金堂跡から10片出土している。
- ⑧B001は9片のうち西面回廊跡から2片、尼坊跡から3片出土している。
- ⑨E103は7片のうち集中して出土した造構はなかった。
- ⑩M002は37片のうち南面回廊跡から8片、西面回廊周辺から6片、東面回廊跡周辺から6片、尼坊跡周辺から14片が出土し、回廊跡と尼坊跡に集中している。金堂跡からも2片出土した。
- これらのことから創建初期の軒平瓦・軒丸瓦とされるP001・B201は、発掘調査により出土した軒平瓦26種類、軒丸瓦33種類の中では出土量が多く、出土場所も複数の建物跡からであり、尼寺では広く使われていたことがわかる。

#### (5) 尼寺における瓦の傾向

- ①尼寺の各堂宇において出土瓦に特徴が認められる点は以下のとおりである。
- ア. 開切り瓦は尼坊跡からは出土していない。このことは、尼坊が南北の二面庇構造で切妻造りであったとする造構からの所見と一致する。
- イ. 南面回廊跡の地業内からは、創建初期の軒平瓦P001・NH3系が出土した。一方、山王庵寺跡では天長8年(831)の銘があることから9世紀中頃に位置付けられた秋間古窯跡群の縄長細の平瓦(縄目がT字状のものも含む)は、金堂跡・回廊跡・尼坊跡の地業内からは出土していない。
- ②瓦当文様の分類判別ができる軒平瓦・軒丸瓦の出土数は、僧寺跡が圧倒的に多いが、僧寺跡における出土比率が大きい軒平瓦P001・P002、軒丸瓦B201は、尼寺跡においても他のものに比して出土比率が大きい。一方、僧寺跡において出土比率の大きい軒平瓦NH301・軒丸瓦E103は尼寺跡ではあまり出土していない。これらのことから以下のこと事が指摘できる。
- ア. 創建初期に僧寺の複数の堂宇で使用された笠懸鹿ノ川窯産の軒平瓦P001・軒丸瓦B201は、建物の違いによる出土量の偏りは見られず、僧寺と同様に尼寺でも中心となるものとして複数の建物で使用されたとみられる。
- イ. 僧寺で主に七重塔で使用された吉井・藤岡古窯跡群産の軒平瓦NH301・軒丸瓦E103は、僧寺跡においても塔以外から出土する例は少ないと、尼寺跡では僅かの出土量(使用量)であり、中心となる瓦ではなかった。
- ウ. 僧寺の修造期とされる秋間古窯跡群産の鳥趾状蓮華文七葉軒丸瓦M002は、僧寺跡に比べると尼寺跡での出土比率(個体数)が大きく、回廊跡と尼坊跡からの出土が多い。
- ③僧寺跡出土の瓦との比較については以下のとおりである。
- ア. 軒先瓦の種類・数とも僧寺跡に比べると少ない。
- イ. 僧寺跡において出土比率の大きい創建初期の軒平瓦P001・軒丸瓦B201は、他の軒先瓦に比べると出土比率が大きい。
- ウ. 秋間古窯跡群産の鳥趾状蓮華文七葉軒丸瓦M002が出土数・比率とも最も多い。
- エ. 僧寺跡では、国分寺創建前に山王庵寺で用いられていた単弁十五葉軒丸瓦H001が1片、単弁八葉軒丸瓦E001が3片、寺井庵寺で用いられていた面連鋸齒文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦K002が3片、多胡郡正倉で用いられていた複弁六葉蓮華文軒丸瓦J001が2片出土している。一方、尼寺跡では国分寺創建前に使われていた軒先瓦は複弁六葉軒丸瓦J001(瓦185)が1片の出土である。
- オ. 文字瓦の種類、特に郡郷名瓦は僧寺跡の方が種類・量とも多いが、僧寺跡では出土していない佐位郡測名郷を示す「測」が出土している。また、僧寺分類「雀」A類(左文字・格子一

体型)が多数出土しており、佐位郡に関係するものが多い。

これまでに触れたとおり、尼寺跡から出土した軒平瓦・軒丸瓦の範種と数量は僧寺跡に比べると少ない。このことは、僧寺では長い期間補修が行われたが、尼寺は短期間で堂宇が滅失したことだけを表していると考えにくい。範種の数の違いは、堂宇の数や規模に応じて使用された瓦の枚数の違いも反映していると考える。なぜなら、僧寺の修造期における範種ごとの出土点数は、多くの範種では創建初期のものに比べると僅かな量である。つまり、ある時以降まとまって瓦を葺き替える、あるいは差し替えることはなく、必要が生じた都度に葺き替え等を行ったためまとまった枚数を必要としなくなったからとみることができる。したがって、範種の数の違いは建物の存続期間だけを表していると考える必要はない。そして、瓦の葺き替えの時に同じ文様の瓦を二寺に同時に供給されることもあり、尼寺に範傷のない軒丸瓦が供給されたこともあるのがわかる。

#### (6) 尼寺の創建および廃絶時期について

1) 創建着手の時期 尼寺の創建造営着手の時期は、僧寺からそれほど隔たった時期ではないと考えられる。これは、尼寺跡出土の軒先瓦の中では、僧寺創建初期の軒平瓦P001・軒丸瓦B201の出土量・比率が高く、次に出現する軒平瓦P002も尼寺跡出土瓦の中では出土比率が他の軒平瓦に比べれば大きいことによる。僧寺で必要とする量の供給が終わる時期になってからこれらが尼寺に供給されるようになったとはみられない。尼寺跡出土の軒平瓦P001の瓦当文様には、唐草文の稜線が鋭いものや瓦筋の傷がないものなどがあり、瓦筋が新鮮なうちに製作した軒平瓦が供給されたとみることができる。また、軒丸瓦B201では図版からの読み取りという制約付きだが、僧寺跡では弁先から界線まで傷のあるものが出土している一方で、尼寺跡では傷のないものも出土しており、軒平瓦と同じ傾向があると見ることができる。

ところで、僧寺跡では国分寺創建前に他の寺院で用いられた軒丸瓦が複数出土している。しかし、その出土量は20片足らずでそれらが主として使用された建物が存在したとは考えにくい。どのような目的・意図でこれらの瓦が僧寺に持ち込まれたのかはわからないが、これら創建前の軒丸瓦が複数あることから創建着手は僧寺の方が早いとしても、このことをもって尼寺の創建着手時期を僧寺よりも遅いと考える必要はない。さらに、(5)①イに記載した9世紀中頃の平瓦は、これまでのところ地業内から出土していない。したがって、9世紀中頃以前にすでに回廊は完成していたとみることができる。したがって、回廊よりも重要な堂宇である金堂などの着手時期は、僧寺創建着手からそれほど時間を隔てることなく行われたとみてよい。

2) 廃絶時期 上野国の古代史を解明する重要な史料である長元3年(1030)に作成された「上野国交替実録帳」には、確実に尼寺に関する記述と認められるものはない。ただし、項目として「国分ニ寺諸定額寺仏像經論資財雜具堂塔雜舎」があり、僧寺と尼寺が国司交替時の破損の状況や、前任国司のそれへの対処の如何が交替に際して報告すべき項目の一つとされていたことがわかる。しかし、尼寺がいつ頃廃絶されたのか、つまりいつ頃まで補修などが行われて寺院として機能していたのかを明らかにする史・資料はない。したがって、上野国内の他の寺院跡から出土した瓦の状況から廃絶時期を推定することとした。

○軒丸瓦B001(瓦369)は、西面回廊跡・尼坊跡などから7片出土している。

この軒丸瓦は、山王廃寺の分類および編年ではIX類、2・3期に区分され、9世紀中頃に比定された2・4期より以前、8世紀末以降との見解が示されている(註14)。このB001は多くの廃寺跡・遺跡から出土あるいは表表されており、二寺跡のほか綿貫廃寺跡・熊野堂遺跡I・水沢廃寺跡・唐松廃寺跡など榛名山南麓中心に広がりがある。綿貫廃寺は9世紀後半以降の創建(註15)と考えられているが、松田 猛の指摘(註16)にあるように、製作技法が複数あり、範傷の進行にも程度差があることから、



B001 瓦369

比較的長い期間にわたる瓦の使用、窯の移動などが想定されるものである。綿貫廃寺跡出土のものは瓦当裏面に布目があり、また瓦正面には弁を貫く範傷もあることから後出のものと考えられる。一方、川原嘉久治はこの軒丸瓦の年代観を9世紀前半(註17)としている。これらのことから、B001は9世紀前半から使用されたものと考える。なお、尼寺跡出土の瓦369は瓦当裏面がナデによるので、松田の「古」・「新」2分類では「古」に属するものである。

○軒丸瓦B105(瓦448)は、僧寺のほか須田茂により上植木廃寺(024型)、黒熊中西遺跡(0類)の瓦として紹介されている。上植木廃寺ではⅤ期に区分され、平安時代中期から後末期、10世紀から12世紀の年代幅を与えており(註18)。黒熊中西遺跡についてはここで検出された寺院跡を「10世紀前半頃に营造され、11世紀(前半)頃に廃絶した」(註19)としており、両寺院ともこの瓦の使用を10世紀代と考えている。ただし、上植木廃寺の調査概報(註20)では「廃寺出土なし」とあり、また、黒熊中西遺跡の調査報告書でも本文中にこの瓦について記載がないことに注意を要する。

一方、黒熊中西遺跡の西約6kmの白倉下原・天引向原遺跡の発掘調査により、9世紀後半に属する堅穴建物跡(89号住居)から同様の軒丸瓦が出土している(註21)。このことからB105も9世紀代に使用されていた瓦と認められる。

○11世紀代に廃絶になった寺院において最終末に属する軒丸瓦の文様に、極端なほど簡略化・抽象化された子葉が無く弁先が丸い四葉のものがある。黒熊中西遺跡2号建物跡は、基壇隅部に屋根からの水滴受けのために口縁部を上にした正位置で羽釜が設置されていたことから、10世紀代に存在した寺院跡とされている。この2号建物跡からは軒丸瓦E類(上図A)が出土している(註22)。また、同じく11世紀まで存続した山王廃寺跡からも類似した文様の軒丸瓦XV式(上図B)が出土し、2-5期に区分されている(註23)。一方、僧寺跡においては蓮弁がU字状の二重花弁で中房に蓮子が4個のA301(上図C)が出土している。このA301は尼寺跡の昭和期及び今回の調査では出土していないが、尼寺跡伽藍地西辺区画の外側約15mの地点からも出土している(註24)。これら花弁の形態が退化した四葉の軒丸瓦は、界線の本数・中房と蓮子の数などに違いがある。A301は中房に蓮子が意識されていることから、黒熊中西遺跡E類、山王廃寺跡XV式に先行するが、大きく隔たるものではないと考えられる。

また、昭和期の調査では手描き鋸齒文の軒平瓦(上図右)が出土している。この軒平瓦と同一文様の瓦は山王廃寺跡でも出土し、軒丸瓦XV式と同じ2-5期に区分されている(手描き幾何学紋軒平瓦VII式 註25)。山王廃寺2-5期は、9世紀中頃に比定された2-4期の次の段階にあたり、山王廃寺の軒先瓦の最終段階に属するものと考えられている。これらのことから、尼寺は僧寺・山王廃寺・黒熊中西遺跡よりも前に廃絶となった可能性がある。

上記の軒先瓦のほか、量は少ないものの凹面に英蘿目痕の残る瓦が出土している(瓦65・85など)。この特徴ある瓦は、9世紀末から10世紀初頭の親音山丘陵古窯跡群の小塚支群生産である。この英蘿目痕が残る瓦は僧寺跡・山王廃寺跡・黒熊中西遺跡・綿貫廃寺跡においても出土している。



B105 瓦448



註21より



A 黒熊中西E類  
註22より転載



B 山王廃寺XV式  
註23より転載



C A301  
註24より転載



註3より

このように9世紀半ば以降10世紀における周辺寺院跡からの出土瓦を参照すると、尼寺には9世紀代は瓦が供給されていた、つまり瓦補修の対象となる堂宇が存在していたが、10世紀になると瓦の供給量が減り、軒先瓦の補充も行われなくなってきたと見ることができる。したがって、これまでの発掘調査により出土した瓦を基にすると、尼寺に瓦葺き建物が存在したのは10世紀初頭から前半までとするのが想当然であろう（註26）。

- 註1 a『史跡上野国分寺跡 発掘調査報告書』群馬県教育委員会 1989  
b『史跡上野国分寺跡 第2期発掘調査報告書』群馬県教育委員会 2018
- 註2 瓦観察表註1参照 P325
- 註3 『上野国分尼寺跡 上野国分二寺中間地城』群馬県教育委員会 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 註4 住谷 修『上野瓦集 西毛編』私家版 1982
- 註5 『上野国分僧寺・尼寺中間地城(7)』群馬県教育委員会 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 註6 註3に同じ
- 註7 『上野国分僧寺跡城縁辺の調査』群馬町教育委員会 1975 図4-7
- 註8 『上野国分僧寺・尼寺中間地城(4)』群馬県教育委員会 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 註9 『下野国分寺跡XII』栃木県教育委員会 財団法人栃木県文化振興事業団 1996
- 註10 『台之原廃寺II』藤塚本町教育委員会 1986
- 註11 註3に同じ
- 註12 大江正行『第3回 関東古瓦研究会 研究資料No.3』関東古瓦研究会群馬部会 1982
- 註13 川原嘉久治「西上野における古瓦散布地の様相」『研究紀要10』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- 註14 栗原和彦『山王廃寺 平成21年度調査報告』VII出土瓦
- 註15 『綿貫遺跡』高崎市教育委員会1985。未報告だが最近の2期目の発掘調査では、基壇の東側からこの瓦をカマドの袖の構築材として使用した堅穴建物が検出され、この堅穴建物は共伴遺物から9世紀後半から10世紀の年代観で妥当性があるとの調査担当者から教示を受けた。
- 註16 松田 犀『綿貫遺跡出土瓦について』『綿貫遺跡』高崎市教育委員会 1985
- 註17 川原嘉久治『櫟名山麓の古代寺院II』『研究紀要11』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- 註18 須田 茂『上植木寺院跡の軒瓦の型式分類』『伊勢崎市史研究 3』伊勢崎市史編さん委員会 1985
- 註19 『黒熊中西遺跡(1)』群馬県教育委員会 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 日本道路公団 1992
- 註20 『新屋敷遺跡 上植木廃寺周辺遺跡II 上植木廃寺』伊勢崎市教育委員会 2009
- 註21 『白倉下原・天引向原遺跡V』群馬県教育委員会 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 日本道路公団 1997  
なお、当該堅穴建物跡(89号住居)からは、転載した軒丸瓦のほか「福天寺」の墨書きがある須恵器坏が出土しており、その北に「9世紀後半は寺院が確実に存在」し、「9~10世紀代に比定できる」と報告されている。
- 註22 註19に同じ
- 註23 註14に同じ。
- 註24 『上野国分寺隣接地域発掘調査報告』群馬県教育委員会 1979
- 註25 註14に同じ
- 註26 大江正行は註3の第8編において、講堂跡(現尼坊跡)について建て替えがあったとしたうえで「最末の瓦は唐目のみの女瓦が1点あり、9世紀末頃の瓦の差し替え保全がなされていた」とし、金堂跡についても「瓦類の末葉は(略)唐目の女瓦で9世紀末葉の製品であり、差し替え」が行われたことを想定している。  
また今回未調査の中門については「上野国分寺式鉢瓦の存在状態や占める割合は多く、最末の唐目女瓦も存在することから、8世紀中頃の創建状態を9世紀末葉まで維持していたと考えられる」とし、さらに「9世紀末葉以降に非瓦葺の後出中門か建物の建立を考えたい」としている。尼坊・中門の建て替えについては今回の

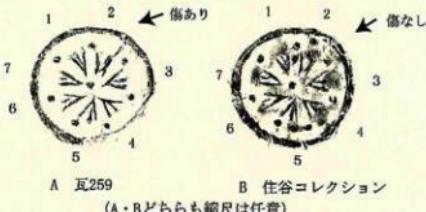
調査では判明していないが、主要堂宇では9世紀末の段階まで瓦の差し替え（小規模な補修）が行われていたとする点では、今回の調査結果と異なるものではない。

補1 今回の調査で、鳥趾状蓮華文七葉軒丸瓦M002が多数出土した。

この軒丸瓦は、B001と同じく長い期間にわたって使用されたか、あるいは短期間に相当数を製作した可能性がある。それは、次図のとおり、瓦の周縁にまで傷が延びているものが複数見られるからである。

図Aの弁2の右側から周縁に向ってまっすぐ伸びているものが傷である。そして、この軒丸瓦が尼坊跡・回廊跡から比較的多く出土している。この軒丸瓦について大江正行氏から、尼寺で大量に瓦の書き替えを行った最後の瓦ではないかと教示があった。僧寺の修造期に区分される秋間古窯跡群の軒丸瓦M002は、同じく修造期に区分される他の範種の軒丸瓦に比べ出土点数が多いことから、この大江氏の示唆は貴重すべきものと考えられる。二寺創建着手にあたって使用された瓦は笠懸古窯跡群・吉井藤岡古窯跡群産のものであったが、補修段階になると秋間古窯跡群産の瓦が使用されるようになっている。そしてこのM002は山王庵寺跡からは出土しているが、これら3寺院跡以外からは出土していない。同じように長い期間同一の瓦が使用された軒丸瓦B001は、二寺のほか榛名山南麓地域の複数の寺院跡から出土しているのとは異なり、供給先が限られたうえで大量製作が行われた特別な瓦であった可能性がある。

補2 古代上野国における瓦の生産窯については、大江正行・木津博明により多くの報告がなされており、胎土の観察にあたっては『国分境遺跡』群馬県教育委員会 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990 に依るところが大きい。



(A・Bどちらも縮尺は任意)

謝辞 上野国分尼寺跡出土瓦の整理・観察にあたり、相京建史、飯塚 誠、大江正行、小林澤雪絵、木津博明、高井佳弘の各氏には、上野国分寺所用瓦のほか群馬県内他遺跡出土の瓦・古窯跡について多くの教示と指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。

## 第4節 上野国分尼寺跡の特徴と歴史的意義

### (1) 上野国分尼寺跡の特徴

1) 僧寺・尼寺の伽藍の状況が判明 平成28年(2016)から5か年度にわたる確認調査で、上野国分尼寺(以下尼寺)跡の伽藍地範囲が判明し、主要堂宇の金堂跡・回廊跡・尼坊跡が調査された。これによって一定の精度をもって伽藍配置が復元され、先行して確認調査や史跡整備が進められている上野国分寺(以下僧寺)伽藍との多角的な対比が可能となった。さらに、今回の調査成果を踏まえ、上野国分僧寺・尼寺中間地域や元総社蒼海遺跡群などの周辺調査による膨大な成果を再検討することで、現時点では未詳である僧寺・尼寺における付属院地の状況や寺院地の範囲について新たな知見が得られる可能性も高まった。

須田勉は、「日本の国分寺制度の特色は、国分僧寺と国分尼寺の二寺制を採用した点にある。したがって、国分寺制度を評価するにあたっては、国分僧寺と国分尼寺の両寺の実態が明らかになって初めて可能となる」(註1)と述べ、後世の関心が国分僧寺に向けられるために国分尼寺の解明が進んでいないことを憂慮して、全国の国分尼寺が30%近くも判明していない現在の状況について、国分二寺制を採用した歴史的意義の解明に対する根幹にかかる問題(註2)としている。

今回の調査から、上野国では僧寺・尼寺各伽藍の創建着手時期に大きな差はみられず、尼寺の堂宇は僧寺と比べ小規模となるものの基礎地業など構築技法に特段の格差は認められない。一方、衰退の進行を示す伽藍地区画の形骸化は、築垣基部に構築された堅穴建物の時期をみる限り、尼寺のほうが少なくとも四半世紀以上早く、主要堂宇の金堂や尼坊は焼失した建築部材の堆積状況からAs-B降下前には消滅していたようである。さらに、僧寺では中世に墓域が形成されて本来の機能を失うが、国分寺の遺跡として伝承され続けていくに対し、尼寺では中世には伽藍地西辺区画溝の拡張痕跡や、尼坊跡の中央やや西寄りを分断し南北方向へと延びる溝が構築されるなど跡地における土地の再利用がうかがわれる。土地地割に伽藍の痕跡を残すものの、僧寺より早い時期に尼寺跡としての記憶は薄れてしまったようである。

2) 「上野国交替実録帳」の存在 上野国は、僧寺や地方官衙の衰退時における具体的な状況が、長元3年(1030)の国司交替に際して作成された不与解由状草案の「上野国交替実録帳」(以下「実録帳」)から知ることができる稀有な地域である。前澤和之は、「本史料の存在により、群馬県地域で実施される国分二寺跡や郡家関連遺跡の発掘調査は、それらの全体構造と個々の機能を明らかにする、また国司による管理監督の実情とその変遷を詳らかにする上で注目されており、その先駆的役割を果たすことが可能である。これまでの実績に加えて、この個性的な地域資料自体の研究を着実に進めることで、より幅広い分野への貢献が可能となる」(註3)と述べている。なお、「実録帳」では、僧寺については南大門・僧房の規模や構造、築垣の規模やその状態、大衆院や倉の存在、さらには金堂内の本尊をはじめとした仏像の安置状況など多彩な記事が載るが、尼寺についてはほとんど失われており、寺田の所在の記載がこれに当たるとみられるだけである。しかしながら、「実録帳」は尼寺の伽藍や付属施設などを推定するにあたり貴重な情報源であり、また、尼寺跡の発掘調査資料は「実録帳」の記載を補していくことが出来るものとして重要である。

3) 国分寺・国府の実態解明にむけ周辺遺跡との相乗効果が期待できる 尼寺の南東約840mに上野国府国庁伝承地(宮鍋神社)があり、周辺は上野国府推定地として前橋市教育委員会による継続的な調査が実施されている。また尼寺の北東約800mには「上野国交替実録帳」定額寺項の筆頭に挙げられる放光寺に該当する山王庵寺が存在し、一帯は上野国内で最も経済的・文化的に開発が進んだ地といえ、

都市的な景観が広がっていたことが窺える。一方で、国分二寺南西の国府南部遺跡群や西方の棟高遺跡群、北西の後疋間遺跡群や西国分遺跡群などでは、小規模な居住域が点在する田園的景観が多くを占めていたとみられ、僧寺跡・尼寺跡の立地環境は当時の地域社会の様相を俯瞰できる位置にあったといえる。このことは、周辺地域には多種多様な生活形態が存在し、国分二寺とも様々な形でかかわりがあったものとみられる。佐藤 信は、これから國分寺研究に必要な視点を「國分寺の造営と在地社会との関係を双方向からとらえる視点」(註4)と述べており、郡司層や在地富豪層からの視点に留意することを説いている。前記通り、尼寺跡は古代の地域社会構造を解明し得る手掛かりが豊富に埋蔵される地域にあるといって良く、今後調査の進展が期待される。

- 4) 遺跡の保存状態が良好である 尼寺伽藍地に該当する区域は、現在ほぼ全面が畑作地であり、住宅など工作物は存在しない。このため、地表下遺構の残存状況はきわめて良好である。ここで留意しなくてはならないことは、昭和30年代に土地改良の造成工事を経ているとはいえ、遺構面の破壊が最小限にとどめられていること、新設された農道は現在でも未舗装であること、耕作の障害となるにもかかわらず礎石が除去されていないこと、などが要因となっている。これには地権者をはじめとする地元の方々の「尼寺」跡との認識が存在しての賜物といって良い。
- 5) 出土瓦の分析による古代造瓦体制の解明 尼寺跡から出土した軒平瓦・軒丸瓦の范種の数は僧寺よりも少ない。一方、尼寺の軒先瓦は上野国国分寺創建期に笠懸古窯跡群で生産された同一の意匠のものが最も多く。次いで吉井・藤岡古窯跡群で生産された瓦が用いられている。その後、秋間古窯群で生産された瓦も用いられている。

また、笠懸古窯跡群で生産された文字瓦には、僧寺において確認されていない佐位郡御名郷を表す「測」が刻まれた文字瓦が複数確認できるが、他の郡郷名瓦は僧寺より少ないなど異なる点もある。このように、尼寺所用瓦の生産窯の変遷は僧寺と同様な様相を見て取れる一方、文字瓦の供給においては異なる点もあり、瓦の生産と供給の体制を解明するうえで貴重な資料を提供している。

## (2) 上野国分尼寺跡の歴史的意義

本遺跡は、礎石建の金堂・回廊・尼坊などからなる一町半四方の広大な伽藍を有する國分尼寺跡であることが明らかとなった。また、調査が実施されている諸国の國分尼寺と比べても伽藍の規模や内容は遜色のないものである。

諸国の國分尼寺では瓦葺屋根が一般的でなかったことが推定される中にあって、上野国分尼寺の主要堂宇の屋根は総瓦葺であった。このことは上野国において瓦の供給が僧寺と尼寺では同等であったことを示している。出土した軒平瓦・軒丸瓦は上野国分僧寺創建初期と同様に笠懸古窯跡群で生産された同一意匠のものが多く、尼寺の建立が僧寺とそれほど時間を隔てて始まったものではないことを示している。一方、僧寺で最終段階とされる范種の軒丸瓦は尼寺からは出土しないことから、尼寺への瓦の供給は9世紀末から10世紀前半までで終了したと考えられる。

上野国分尼寺跡は今回の確認調査で遺跡の価値が明らかになった。内容が判明している國分僧寺とあわせて國分二寺の状況が分かる貴重な例となり、古代にはじまる國分寺制度を理解するうえで欠かせない遺跡と言える。地元の方々が大切に保存してきたこの貴重な遺跡を損なうことなく、将来に残すべく保護措置をはかることは、現在を生きる私たちの責務である。

註1 須田 勉「国分寺研究の成果と課題」『季刊考古学』第129号 雄山閣 2014

註2 須田 勉『国分寺の誕生』吉川弘文館 2016

註3 前澤和之『上野国交替実録帳と古代社会』(株)同成社 2021

註4 佐藤 信『国分寺の造営と地域社会』『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館 2013

#### 主要参考文献

石田茂作『東大寺と国分寺』至文堂 1966

群馬県教育委員会『上野国分尼寺跡発掘調査報告書(昭和44年度調査概報)』1970

群馬県教育委員会『上野国分尼寺跡発掘調査報告(昭和45年度調査概報)』1971

群馬県教育委員会文化財保護課『上野国分寺隣接地地域発掘調査報告』1979

大川 清『増補 日本の古代瓦窯』雄山閣出版 1985

群馬県教育委員会(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『上野国分僧寺・尼寺中間地域(3)』1988

群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡』1988

群馬県教育委員会(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)』1990

群馬県史編纂委員会『群馬県史 通史編1』群馬県 1990

群馬県教育委員会(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『上野国分僧寺・尼寺中間地域(5)』1991

角田文衛編『新修国分寺の研究 第2巻 織内と東海道』吉川弘文館 1991

角田文衛編『新修国分寺の研究 第3巻 東山道と北陸道』吉川弘文館 1991

群馬県教育委員会(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『上野国分尼寺 上野国分二寺中間地域』1993

関東古瓦研究会『関東の国分寺』関東古瓦研究会 1994

上原真人『瓦を読む』講談社 1997

角田文衛編『新修国分寺の研究 第7巻 補遺』吉川弘文館 1997

群馬町誌編纂委員会『群馬町誌 資料編1 原始古代中世』群馬町誌刊行委員会 1998

高崎市市史編さん委員会『新編高崎市史 資料編2原始古代II』高崎市 1999

高崎市市史編さん委員会『新編高崎市史 資料編1 原始古代I』高崎市 2000

前橋市埋蔵文化財発掘調査団『上野国分尼寺寺域確認調査』2000

群馬町誌編纂委員会『群馬町誌 通史編上 原始古代中世近世』群馬町誌刊行委員会 2001

前橋市埋蔵文化財発掘調査団『元総社宅地遺跡・上野国分尼寺寺域確認調査II』2001

森 郁夫『瓦』法政大学出版社 2001

群馬町教育委員会『上野国分尼寺跡北辺遺跡』2002

高崎市市史編さん委員会『新編高崎市史 通史編1 原始古代中世』高崎市 2003

雄山閣『日本の古代瓦』増補改訂版 2004

前橋市埋蔵文化財発掘調査団『元総社著海遺跡群(20)』2009

文化庁記念物課編『発掘調査のてびき—整理・報告書編—』2010

須田 勉・佐藤 信編『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館 2011

山崎信二『古代造瓦史』雄山閣 2011

須田 勉・佐藤 信編『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館 2013

文化庁記念物課編『発掘調査のてびき—各種遺跡調査編—』2013

須田 勉『国分寺の誕生』吉川弘文館 2016

有吉重藏編『古瓦の考古学』ニューサイエンス社 2018

群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡第2期発掘調査報告書—総括編—』2018

前澤和之『上野国交替実録帳と古代社会』(株)同成社 2021

卷頭写真図版1



調査区全景 東→



西面回廊跡(11トレンチ)・伽藍地西辺(10トレンチ)調査状況 北西→



東面回廊跡(15トレンチ) 北→



西面回廊東側盛土下の別工程版築(15-3トレンチ) 南東→



金堂東辺部の版築(13-1トレンチSPFライン) 北西→



金堂北辺部の版築(13-1トレンチSPAライン) 東→



伽藍地南辺の溝状造構(7-3トレンチSPDライン) 南東→

卷頭写真図版3



回廊北東隅内側地業下部の凝灰岩敷き込み  
(13-2トレンチ) 南→



尼坊の地業上面でみられた白色物質(3トレンチ) 南→



西面回廊外側地業断面(11-1トレンチ)  
突き棒の痕跡 南→



瓦塔 西面回廊外側裾(11-1Tトレンチ)から出土

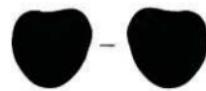
尼坊跡出土 基石



1 (3T 679)



2 (3T 679)



3 (4T 679)

回廊跡北西隅北側出土 整材片



4 (11-1ET 760)

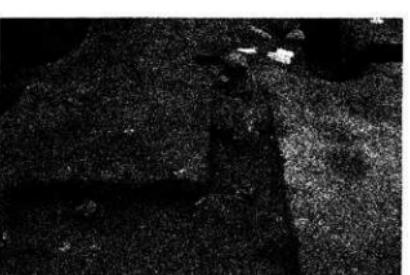
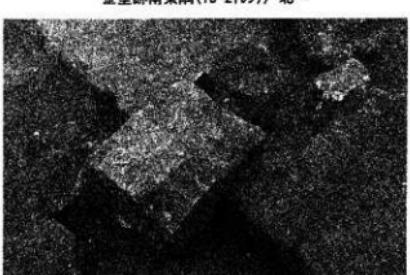
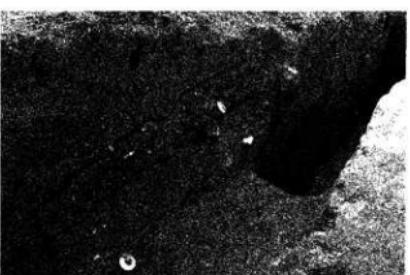
金堂跡北辺出土 壁材片



5 (13-1T 803)

(1) 金堂跡

PL. 1



PL. 2



金堂跡南東隅地業断面(13-2トレンチ・SPHライン) 南西→



(1) 金堂跡  
金堂跡南辺中央部(13-3トレンチ) 北→



金堂跡南辺中央付近「瓦列」(13-3T) 南東→



金堂跡南辺中央付近「瓦列」近景(13-3トレンチ) 東→



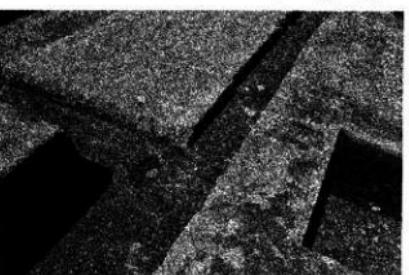
金堂跡南辺中央付近地業断面(13-3トレンチ・SPJライン) 北東→



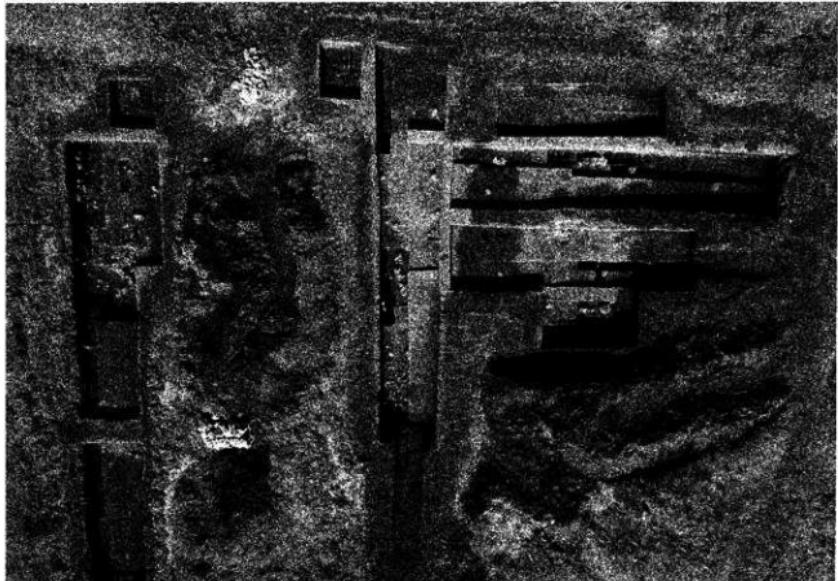
金堂跡南辺中央付近地業断面(13-3トレンチ・SPJライン) 北西→



金堂跡南辺中央付近地業断面(13-3トレンチ・SPJライン) 北西→



金堂跡南辺南側凝灰岩片敷込(13-3トレンチ) 南東→



回廊跡南東隅全景(8トレンチ) 上が北



南面回廊跡東側断面(8-1トレンチ・SPAライン) 南東→



南面回廊跡(8-2トレンチ・SPAライン) 南東→



南面回廊外側裾地業断面(8-2トレンチ・SPAライン) 東→

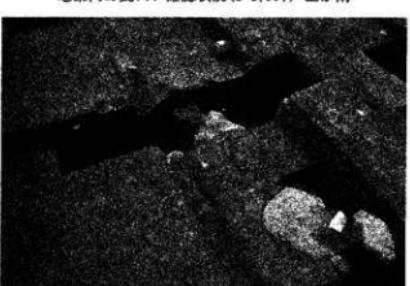
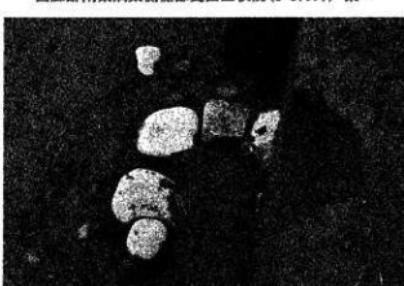
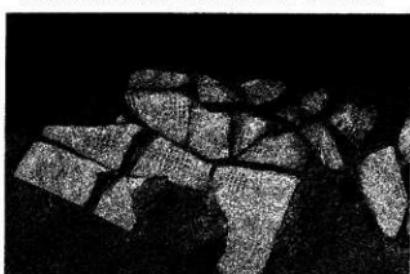
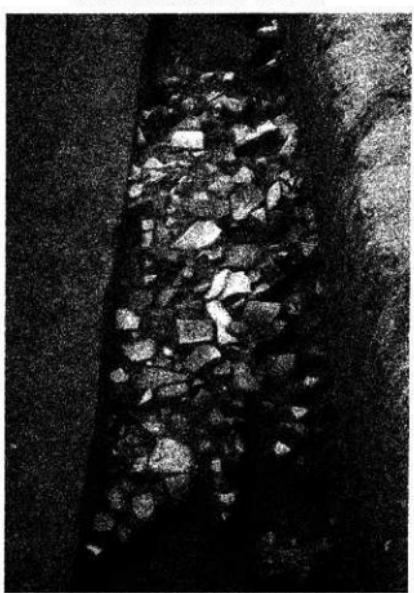


南面回廊内側裾付近地業断面(8-2トレンチ・SPAライン) 北東→

PL. 4



(2) 南面回廊



## (2) 西面回廊



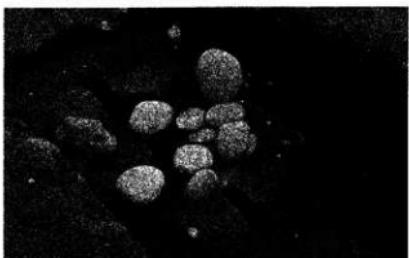
回廊跡北西隅・西面回廊調査区全景(11-1Wトレンチ) 上が北



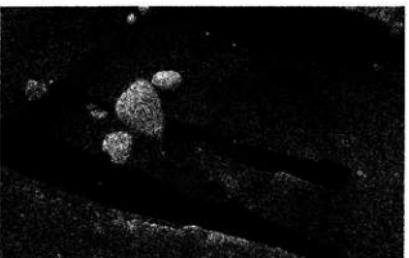
回廊跡北西隅(11-1Wトレンチ) 北東→



回廊跡北西隅礎石・根石(11-1Wトレンチ) 南→



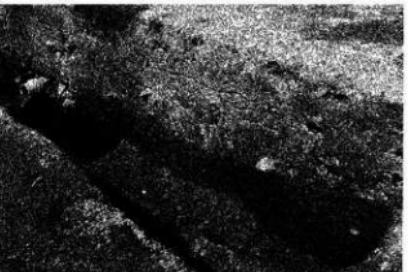
回廊跡北西隅 柱跡1(11-1Wトレンチ) 北東→



回廊跡北西隅 柱跡2(11-1Wトレンチ) 北東→



回廊跡北西隅西侧裾地業断面(11-1Wトレンチ-SPAライン) 北東→

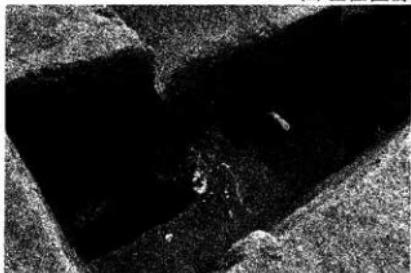


回廊跡北西隅西侧裾地業断面(11-1Wトレンチ-SPBライン) 南東→

PL. 6



回廊跡南東隅西側裾部瓦塔出土状況(11-1Wトレチ) 上が北



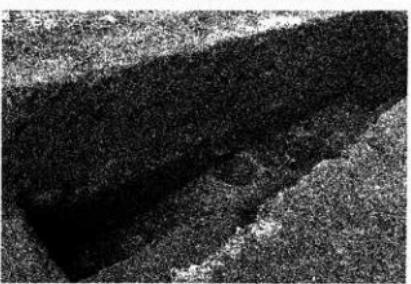
(2) 西面回廊  
西面回廊外側裾付近断面(11-1E-Wトレチ・SPAライン) 北西→



西面回廊跡(11-2Hトレチ) 東→



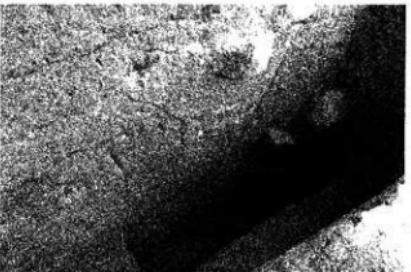
西面回廊外側裾部地業断面(11-2トレチ・SPAライン) 南東→



西面回廊内側裾付近地業断面(11-2トレチ・SPAライン) 南西→



回廊跡北西隅西側裾部地業断面(11-3トレチ・SPAライン) 北東→



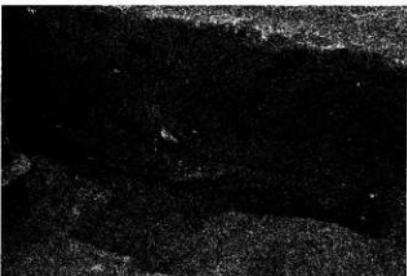
回廊跡北西隅西側裾部地業断面(11-3トレチ・SPBライン) 北西→

(2)西面回廊・東面回廊

PL. 7



西面回廊外側基壇裾部断面(11-4トレンチ・SPAライン) 北東→



西面回廊外側基壇裾部断面南(11-4トレンチ・SPBライン) 南東→



東面回廊跡(15トレンチ) 北→



回廊跡北東隅(14トレンチ) 南→



回廊跡南東隅から東面回廊跡(15トレンチ) 北西→



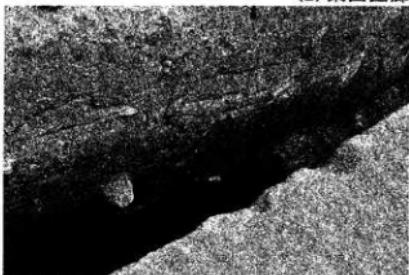
回廊跡北東隅外側地業断面(14トレンチ・SPAライン) 北西→



回廊跡北東隅と金堂取付部(15トレンチ北端部) 東→



回廊地帯下部の凝灰岩片敷込(13-2トレンチ・SPMライン) 南→



回廊跡北東隅内側地業断面(13-2トレンチ・SPMライン) 北西→



東面回廊跡内側裾部(15-4トレンチ・SPAライン) 南東→



東面回廊礫石間地業断面(15トレンチ・SPAライン) 南西→



東面回廊外側裾部地業断面(15-3トレンチ・SPAライン) 南西→



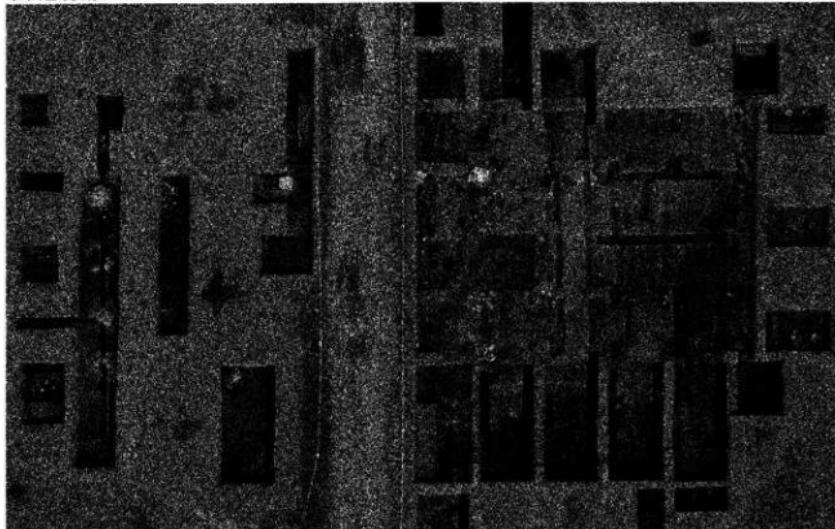
東面回廊内側裾部地業断面(15-2トレンチ・SPBライン) 南西→



東面回廊外側裾部地業断面(15-1トレンチ・SPBライン) 南東→

(3) 尼坊跡

PL. 9



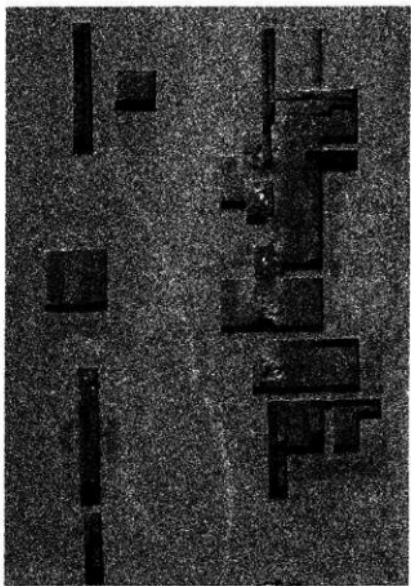
尼坊跡西半部全景(3・4・トレンチ679) 上が北



尼坊跡南辺(3トレンチ679) 西→



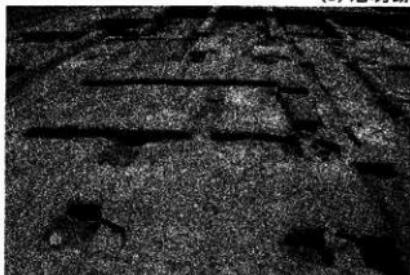
尼坊跡北辺(3トレンチ679) 東→



尼坊跡東側(3トレンチ735) 上が北

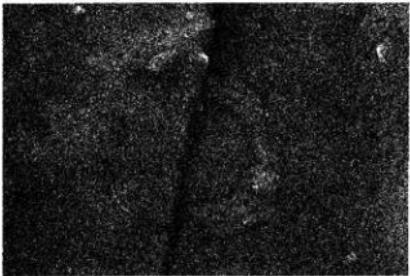
PL. 10

(3) 尼坊跡



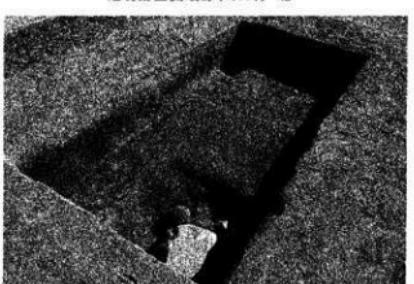
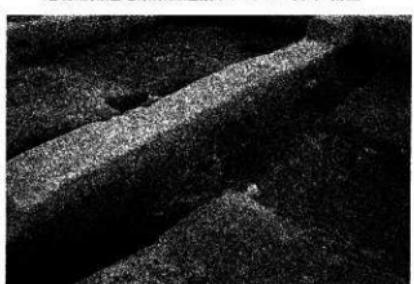
(3) 尼坊跡

PL. 11

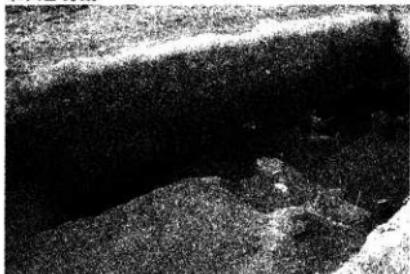


PL. 12

(3) 尼坊跡



## (3) 尼坊跡



尼坊跡北辺 (4トレンチ-SPDライン) 南東→



尼坊跡北辺 (4トレンチ-SPCライン) 北東→



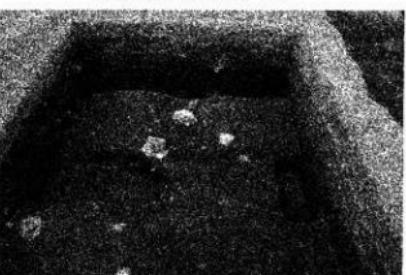
尼坊跡北辺 (4トレンチ-SPEライン) 北西→



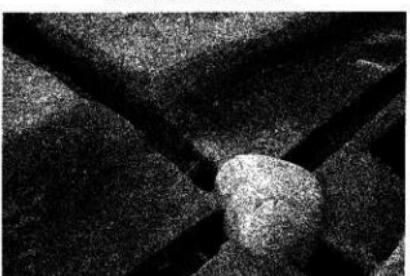
尼坊跡礎石 B1 (4トレンチ) 南東→



尼坊跡南西隅 (4トレンチ) 北西→



尼坊跡南西隅 (4トレンチ-SPFライン) 南→



尼坊跡西辺 磐石D1 (4トレンチ-SPGライン) 南東→



尼坊跡西辺 (4トレンチ-SPHライン) 北西→

(4) 伽藍地北辺



伽藍地北辺 築垣基部(9トレンチ) 南→



伽藍地北辺 築垣基部(9トレンチ) 北→



伽藍地北辺 築垣基部(9トレンチ・SPAライン) 南東→



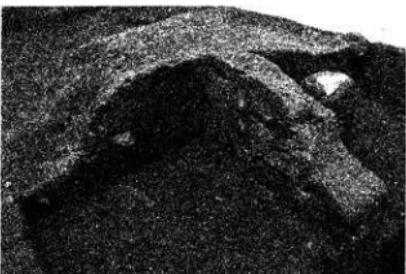
伽藍地北辺 築垣基部(9トレンチ・SPAライン) 北東→



伽藍地北辺 築垣基部(9トレンチ・SPAライン) 南西→



伽藍地北辺 築垣基部北側(9トレンチ・SPAライン) 北西→



伽藍地北辺 築垣基部崩落土(9トレンチ) 南東→

(4) 伽藍地北辺・北東隅

PL. 15



伽藍地北東隅 (5-1トレンチ・5-2トレンチ) 上が北



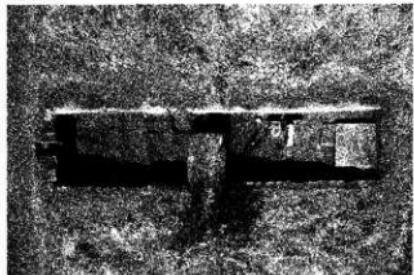
伽藍地北辺 築垣基部 (5-1トレンチ) 南東→



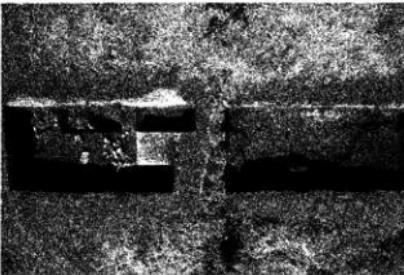
伽藍地北東隅 築垣基部 (5-2トレンチ) 北→



伽藍地北東隅 (5-2トレンチ) 南東→



伽藍地東辺(6-1トレチ) 上が北



伽藍地東辺(6-2トレチ) 上が北



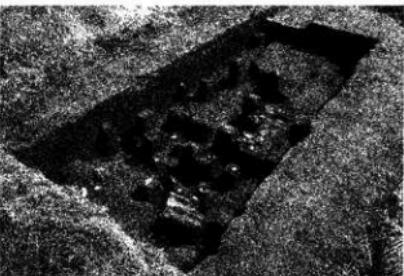
伽藍地東辺 菱垣基部(6-1トレチ) 北東→



伽藍地東辺(6-2トレチ西半) 北西→



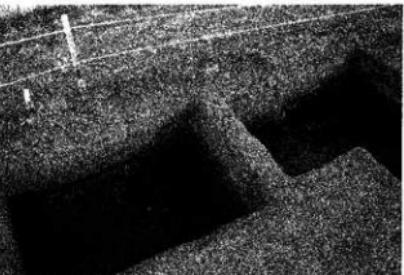
伽藍地東辺(6-2トレチ・SPAライン) 南東→



伽藍地東辺(6-2トレチ東半) 遺物出土状況 南西→



伽藍地東辺(2トレチ北側西端) 南西→



伽藍地東辺(2トレチ南側) 北西→

(5) 伽藍地東辺・掘立柱建物跡

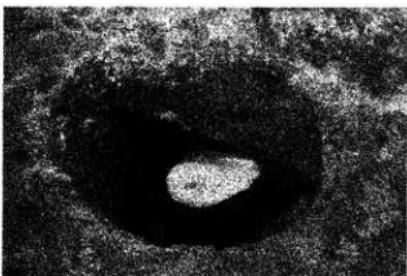
PL. 17



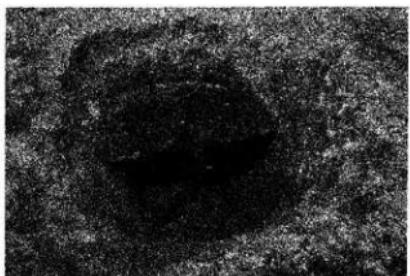
伽藍地東辺(1トレンチ・2トレンチ) 全景 上が北



伽藍地東辺掘立柱建物跡(1トレンチ) 南東→



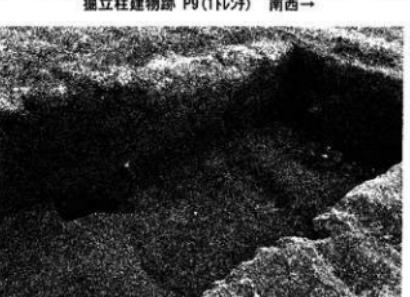
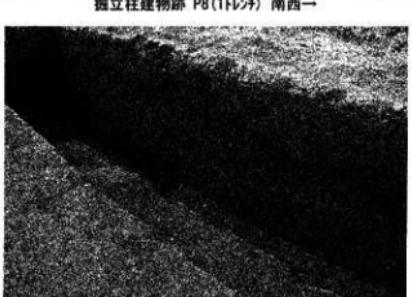
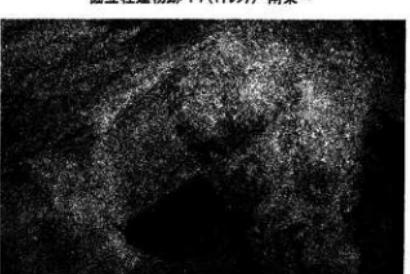
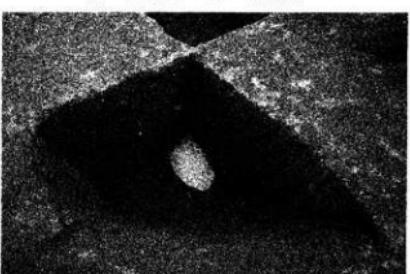
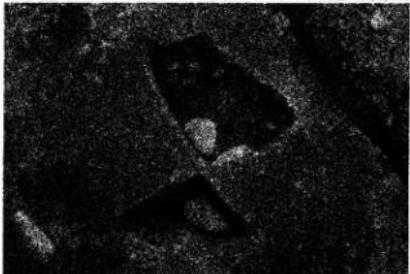
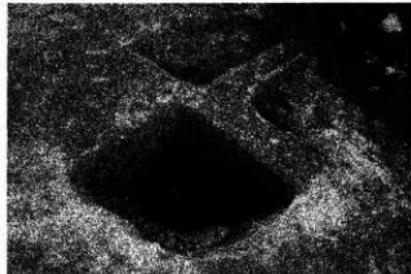
掘立柱建物跡 P1(1トレンチ) 南東→



掘立柱建物跡 P2(1トレンチ) 南→



掘立柱建物跡 P3(1トレンチ) 南→



(6) 伽藍地南辺

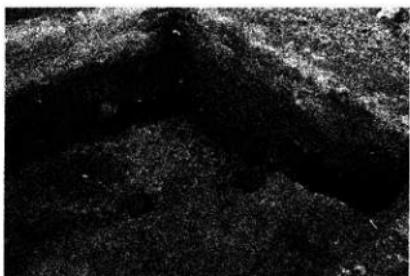
PL. 19



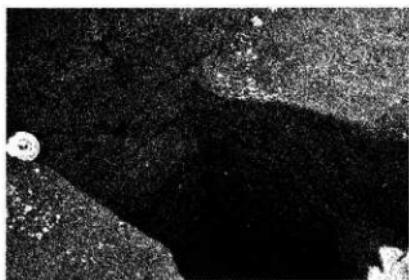
伽藍地南辺(7トレンチ) 上が北



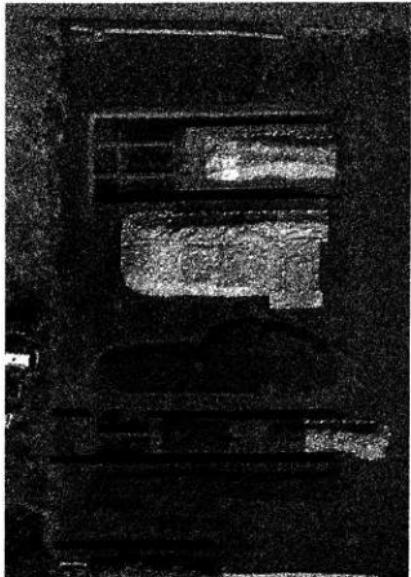
伽藍地南辺(7-3トレンチ) 南西→



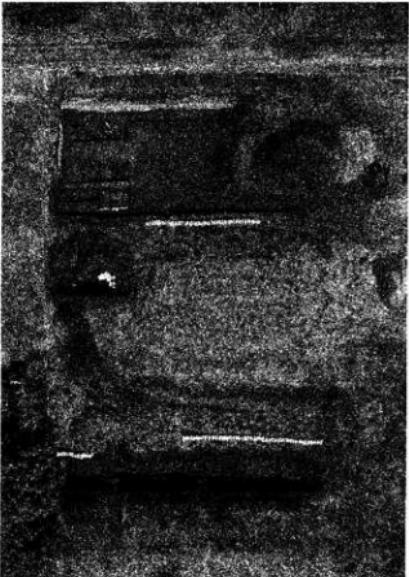
伽藍地南辺(7-3トレンチSPC-Dライン) 南西→



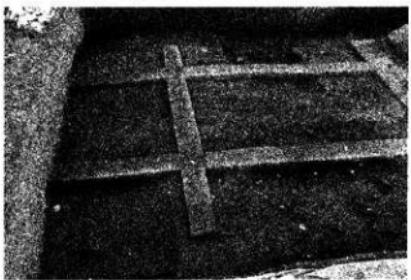
伽藍地南辺 版築断面(7-3トレンチSPAライン) 南東→



伽藍地西辺(10トレンチ735) 上が北



伽藍地西辺(10トレンチ760) 上が北



伽藍地西辺(10-1トレンチ735) 南→



伽藍地西辺 SD2(10-1トレンチ760) 北→



伽藍地西辺 SD2(10-1トレンチ760・SPAライン) 南東→

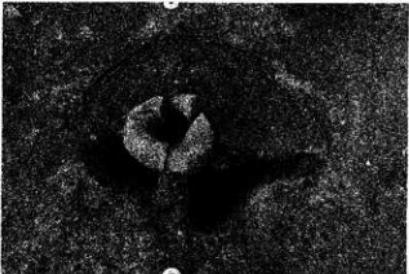


伽藍地西辺 SD2(10-1トレンチ手前SPCライン/奥SPBライン) 南東→

## (7) 伽藍地西辺



伽藍地西辺 SD2 (10-1トレンチ・SPGライン) 北東→



伽藍地西辺 环状加工砾 (10-1トレンチ) 東→



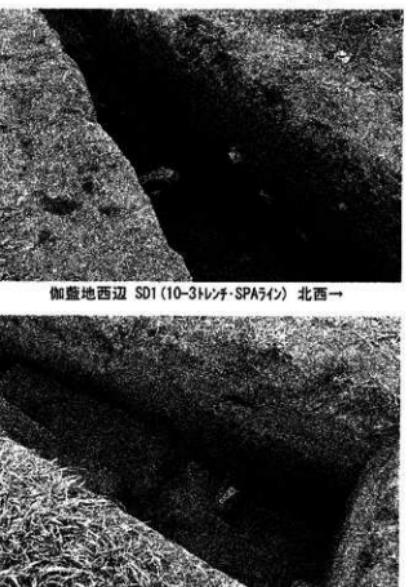
伽藍地西辺 SD1-S1(10-2トレンチ) 西→



伽藍地西辺 (10-2トレンチ西側・SPCライン北端) 南西→



伽藍地西辺 (10-3トレンチ・SPAライン) 北東→



伽藍地西辺 (10-3トレンチ西端・SPAライン) 北西→



伽藍地西辺(10-4T) 昭和52年調査区確認状況 南東→



伽藍地西辺(10-4T) 昭和52年調査時4号溝(手前)と5号溝 南西→



伽藍地西辺(10-4TSPAライン) 昭和52年調査塗堀想定箇所 南東→



伽藍地西辺(10-5T) 南西→



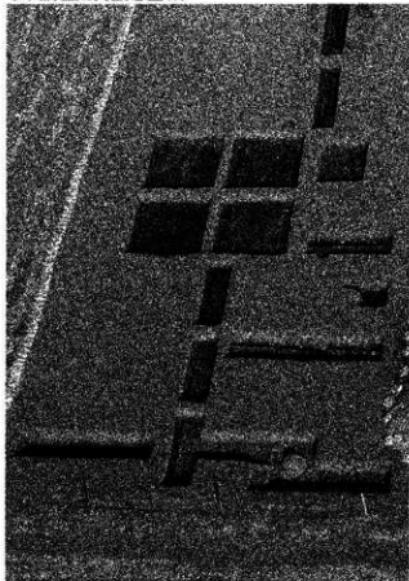
伽藍地西辺(10-6T) 西→



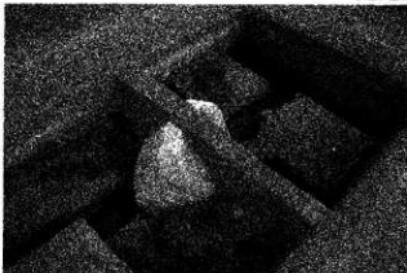
伽藍地西辺(10-7T) 北西→

(8) 講堂跡推定箇所

PL. 23



講堂跡推定箇所(3レンチ735) 南→



講堂跡推定箇所基礎石調査状況(3レンチ679・80-93G) 北西→



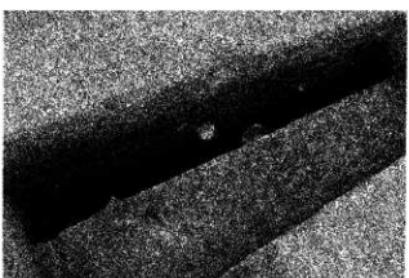
講堂跡推定箇所基礎石調査状況(3レンチ735・80-59G) 南西→



講堂跡推定箇所(3レンチ735・SPGライン北端部) 南東→



講堂跡推定箇所(3レンチ735・SP6ライン中央部) 南東→



講堂跡推定箇所(3レンチ735・SP1ライン) 南西→



講堂跡推定箇所(3レンチ735・SPKライン) 南東→



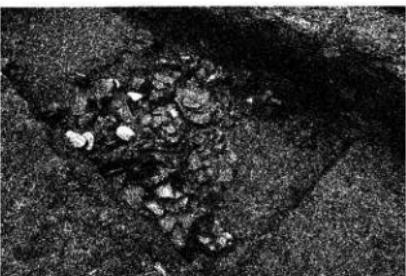
壙地業状施設(11トレンチ北端部) 北東→



壙地業状施設(11トレンチ・SPAライン) 北東→



壙地業状施設2(11トレンチ・SPAライン) 北東→



金堂跡西側瓦溜り(11-1トレンチ北端部) 南西→



金堂跡西側瓦溜り付近土層断面(11トレンチ北端部・SPAライン) 北西→



3トレンチ SII(尼坊跡北側) 北東→



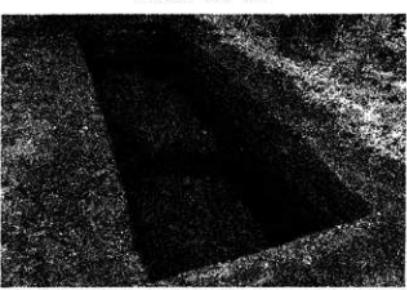
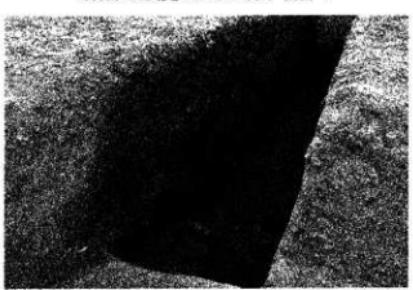
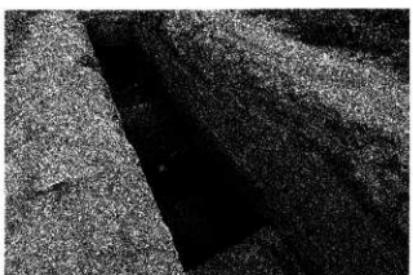
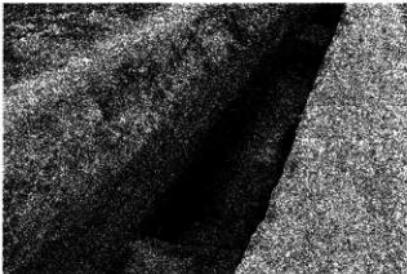
6-2トレンチ SII(SPAライン) 北西→

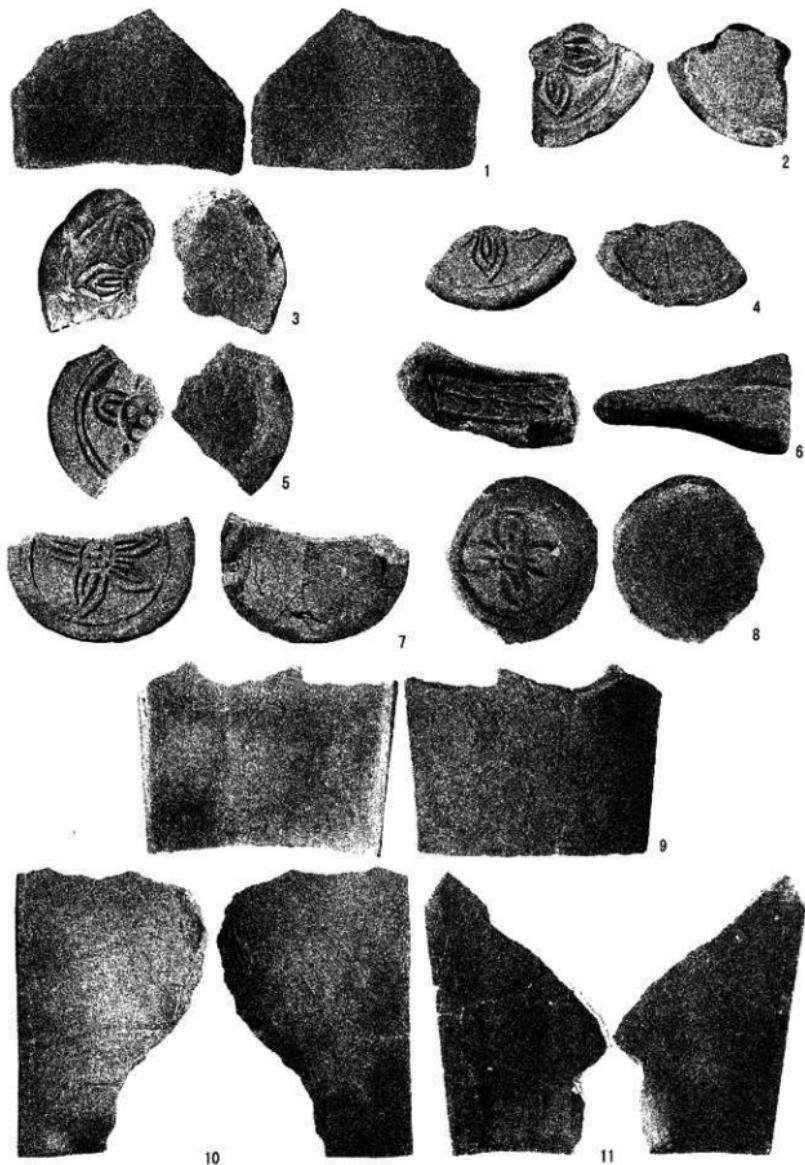


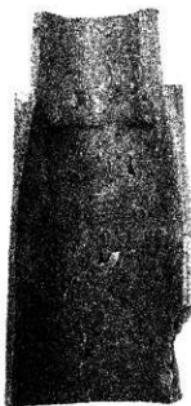
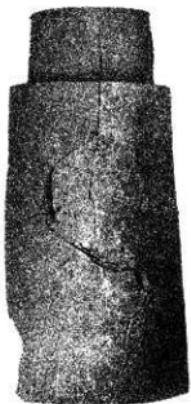
6-2トレンチ SIIカマド跡 南西→

(10) 積穴建物跡

PL. 25







12

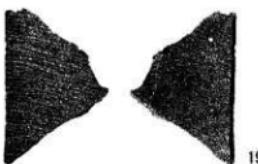
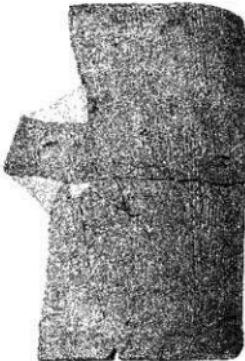
13



14

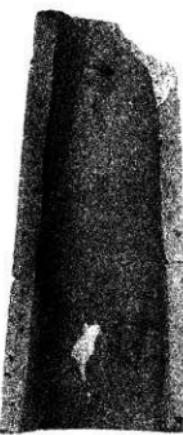
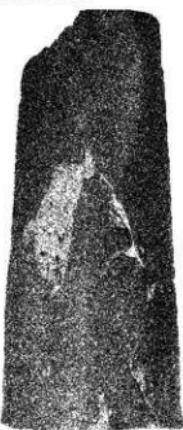


15





21



22

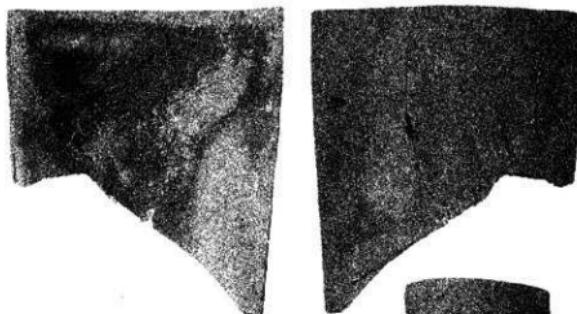
23



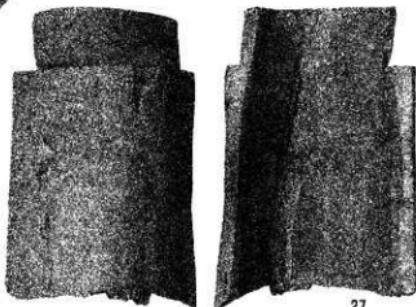
24



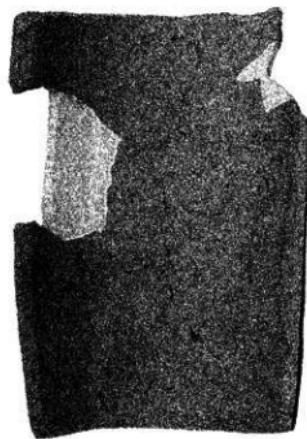
25



26



27



28



29



31



32



30



33



34





35



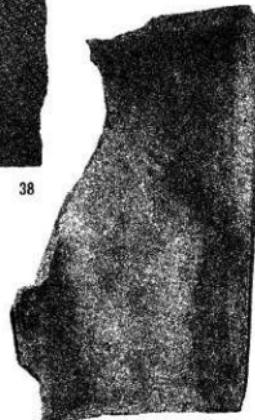
36



37



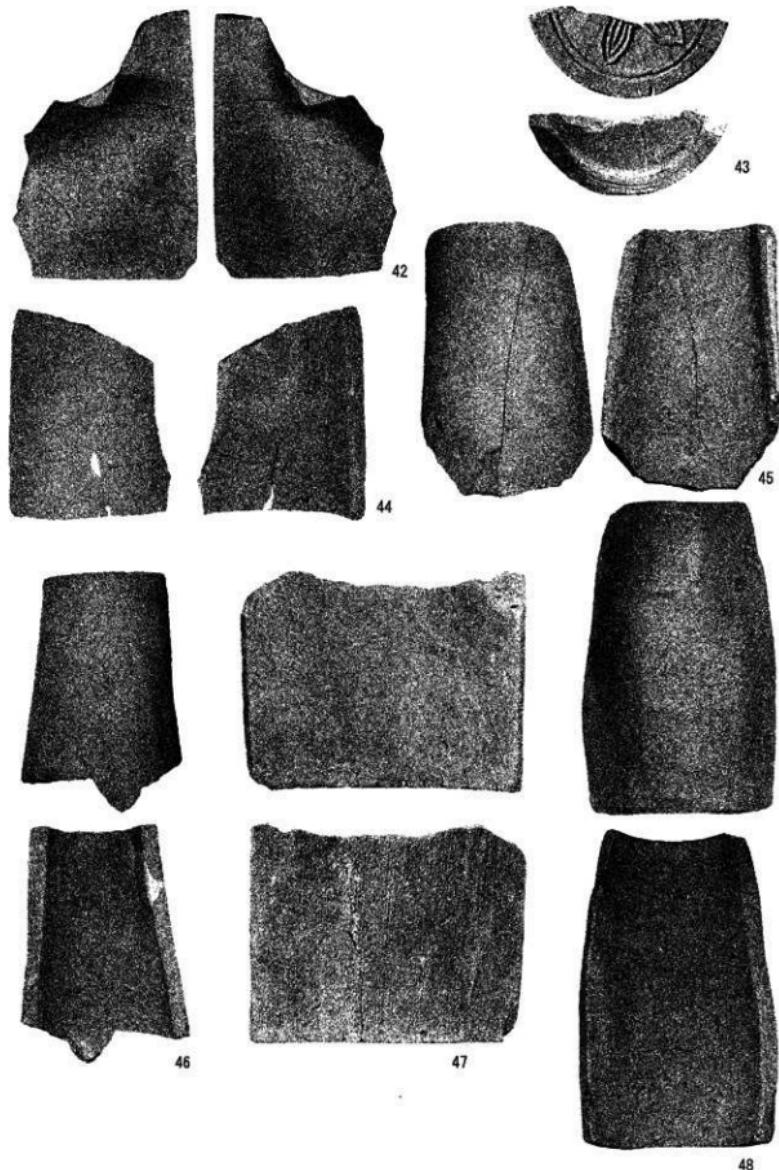
38



39



41



PL. 34



49



50



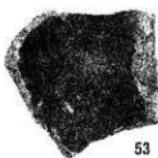
51



52



53



54



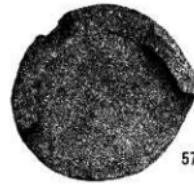
55



56



57



58



59



60



61

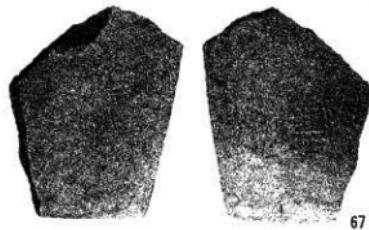
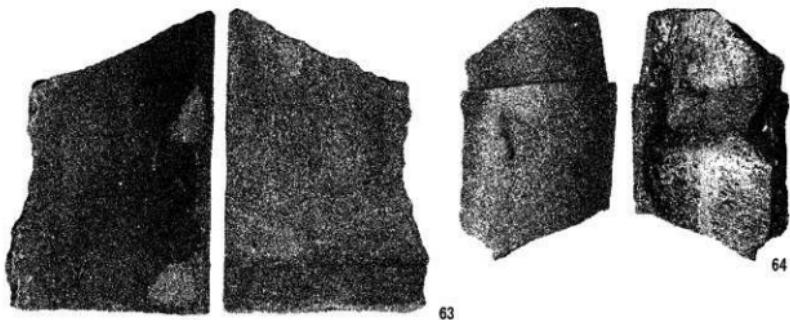


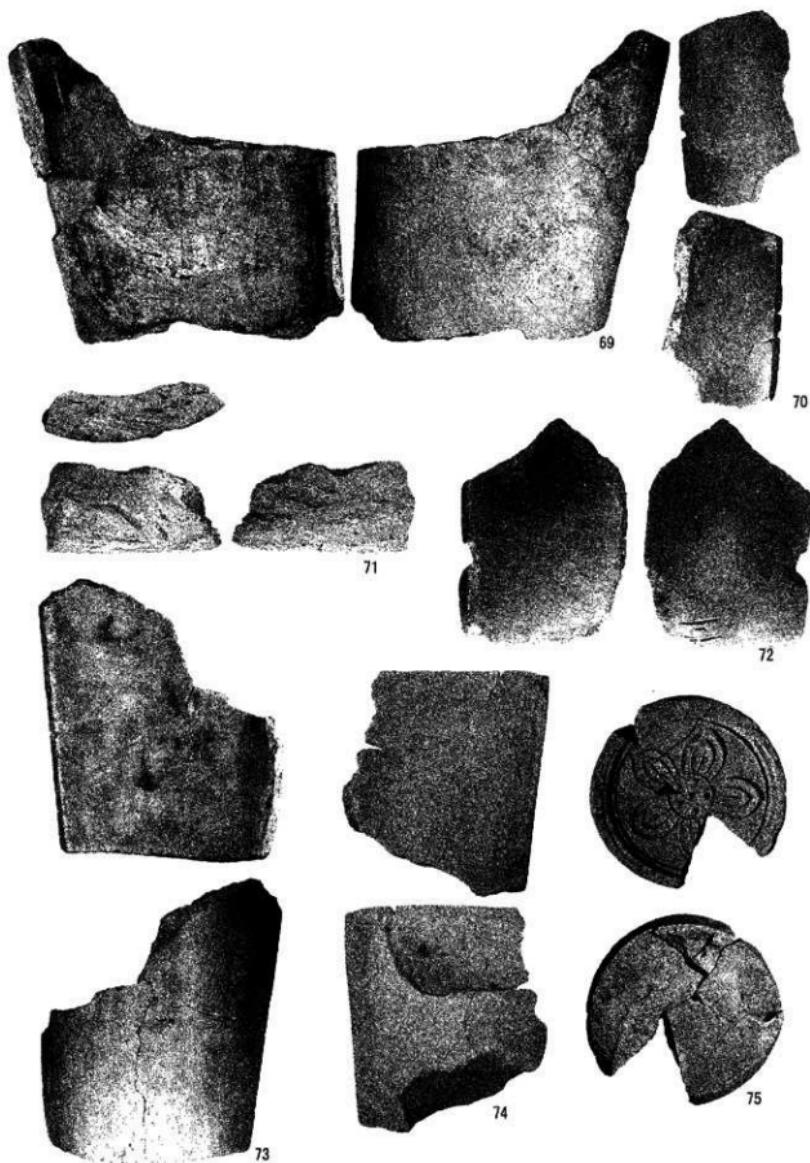
62

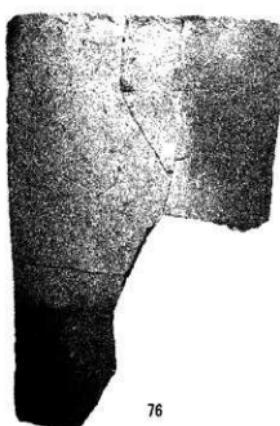
九瓦貼り合せ痕  
縮尺任意



瓦当面側



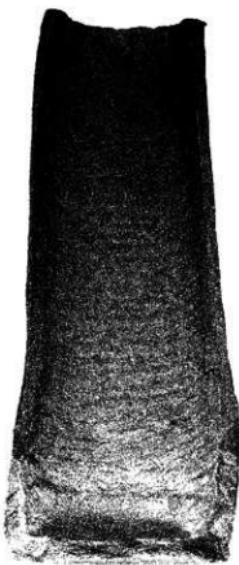




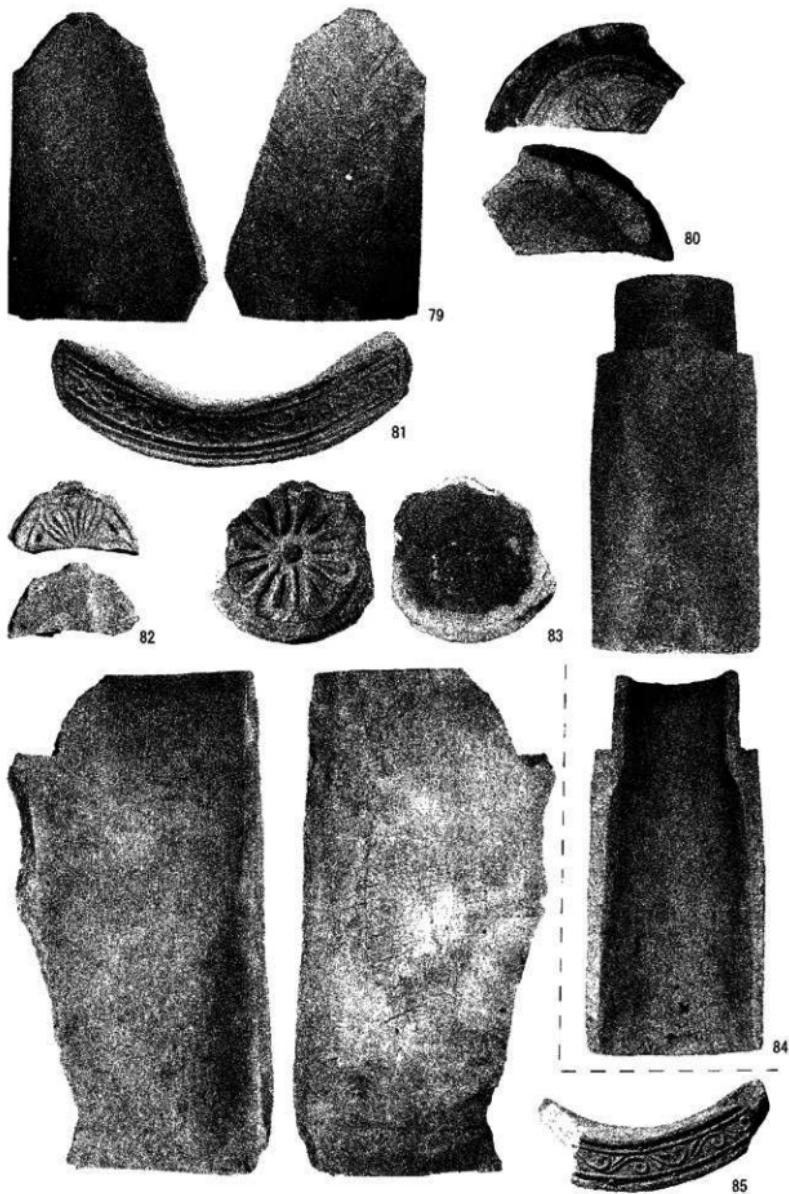
76



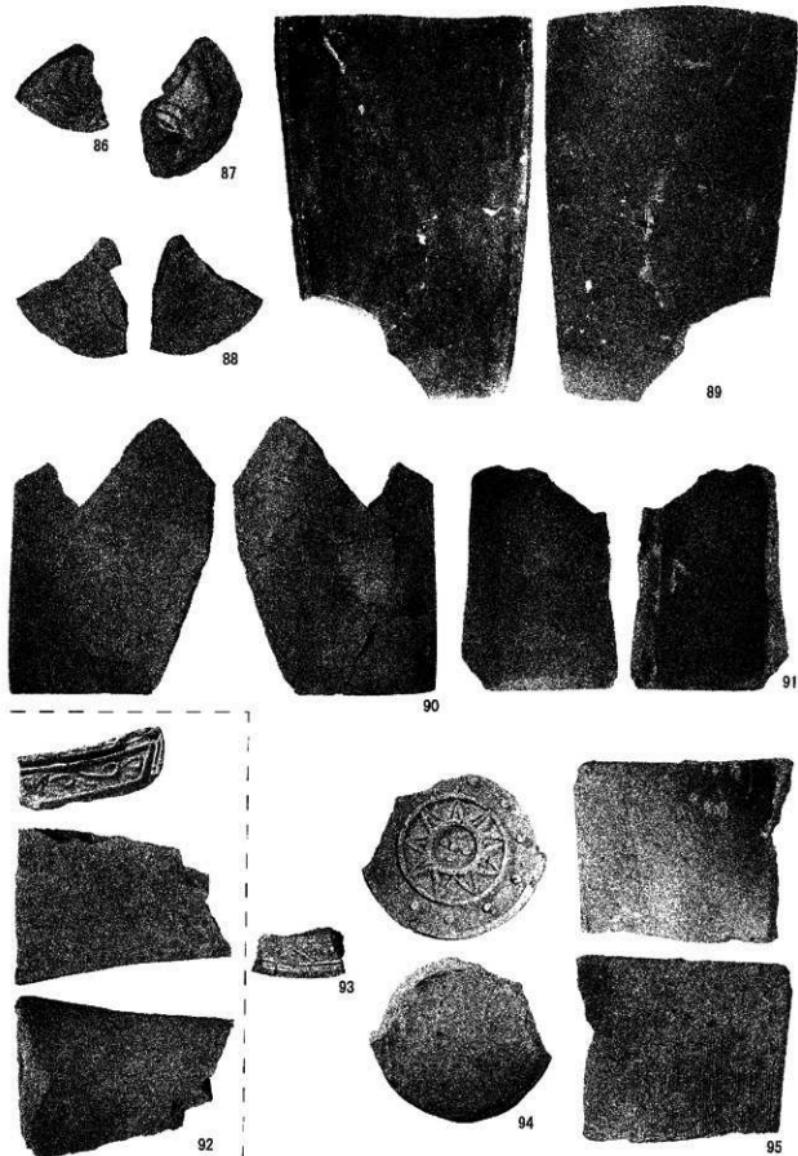
77



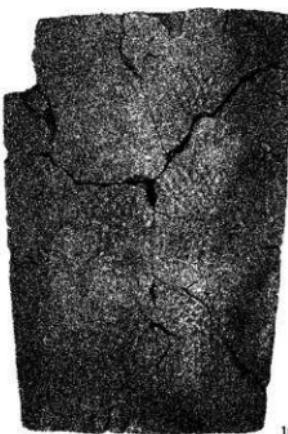
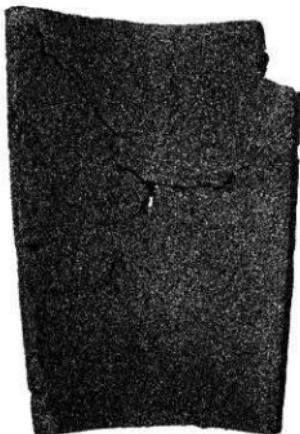
78



PL. 40



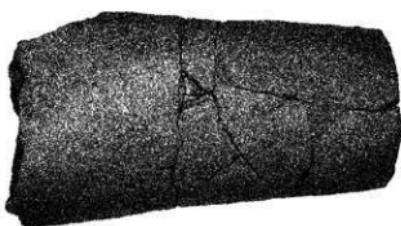




102



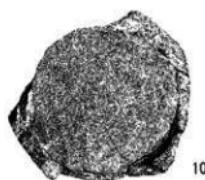
103

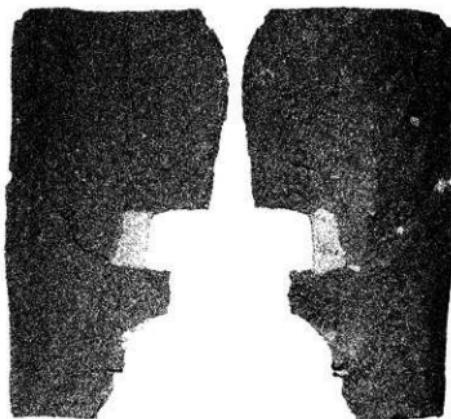


105



106

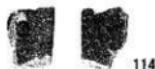




112



113



114



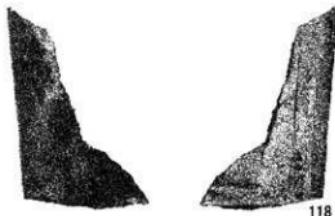
115



116



117



118



119

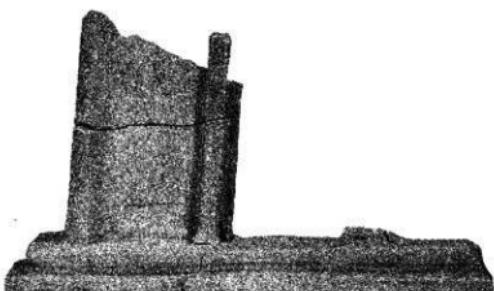


120

基壇及び初層



左側面



正面



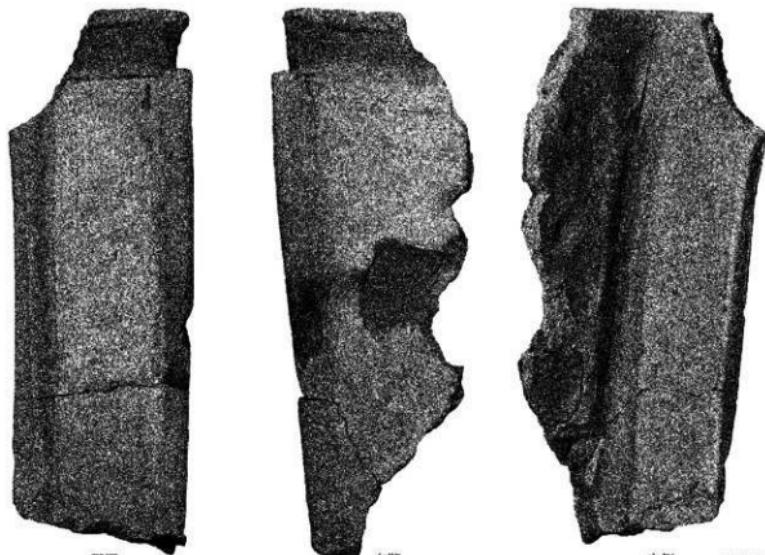
内側



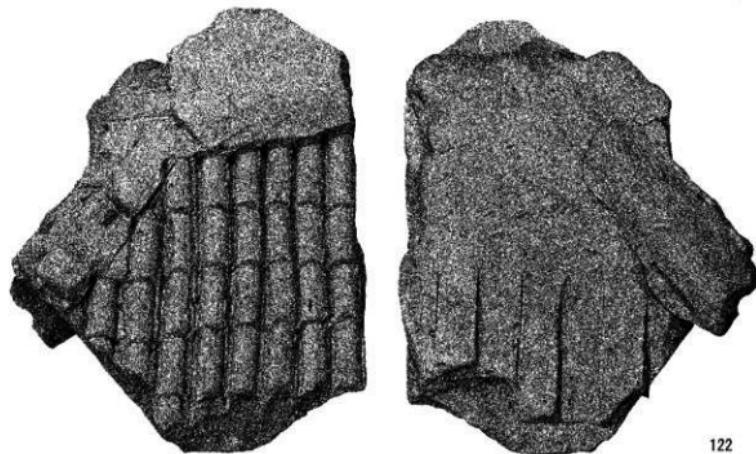
121-1

基壇上から

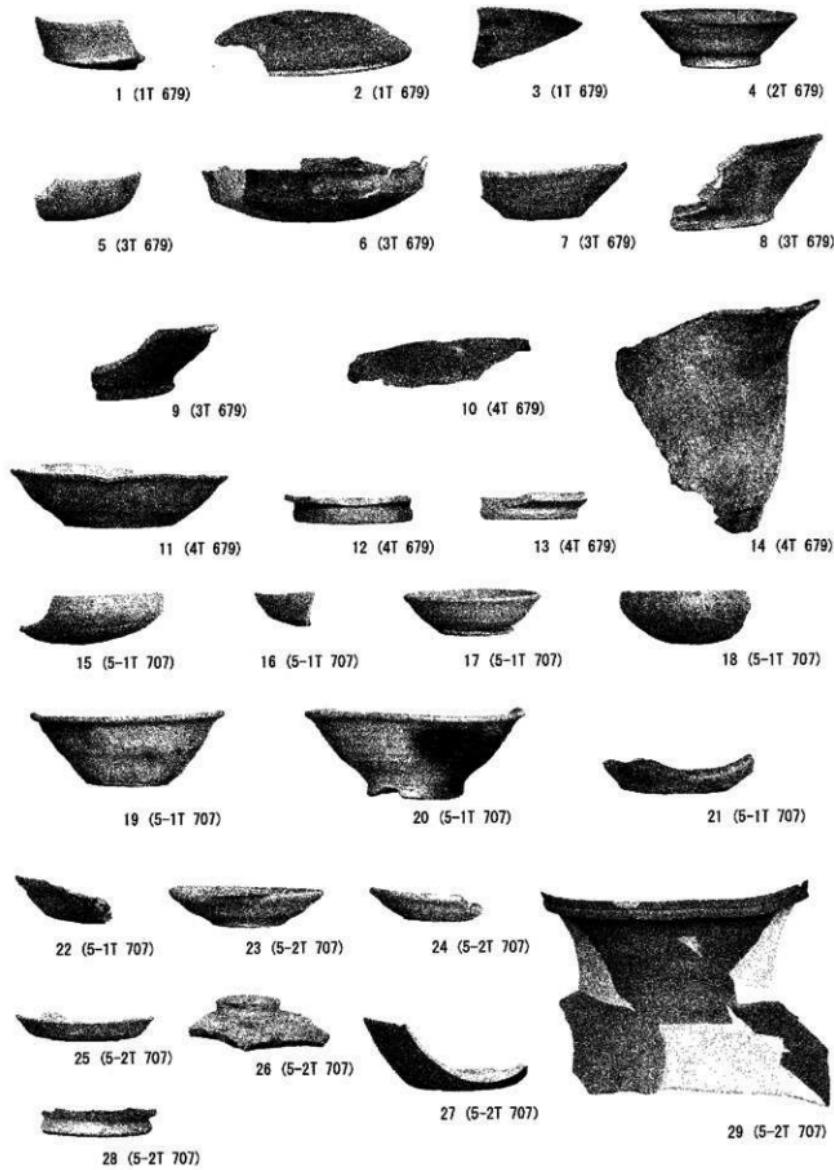
初肩輪部



121-2



122



土器類

PL. 49



30 (6-1T 707)



31 (6-2T S11 707)



32 (6-2T S11 707)



33 (6-2T S11 707)



34 (6-2T 707)



35 (6-2T 707)



36 (6-2T 707)



37 (6-2T 707)



38 (6-2T 707)



39 (6-2T 707)



40 (6-2T 707)



41 (7-3T 707)



42 (7-3T 707)



43 (7-3T 707)



|



45 (8-2T 707)



46 (8-3T 707)



47 (8-3T 707)



48 (8-3T 707)



44 (8-2T 707)



49 (8-3T 707)



50 (9T S11 735)



51 (9T S11 735)



52 (9T S11 735)



53 (9T S11 735)



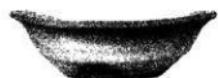
54 (9T S11 735)



56 (10-1T 735)



57 (10-2T S11 735)



55 (9T S12 735)



58 (10-2T S11 735)



59 (10-2T S11 735)



60 (10-2T S11 735)



61 (10-2T S11 735)



62 (10-2T S11 735)



63 (10-2T S11 735)



64 (10-2T S11 735)



65 (10-2T S11 735)



66 (10-2T S11 735)



67 (10-2T S11 735)



68 (10-2T 735)



69 (10-2T S12 735)



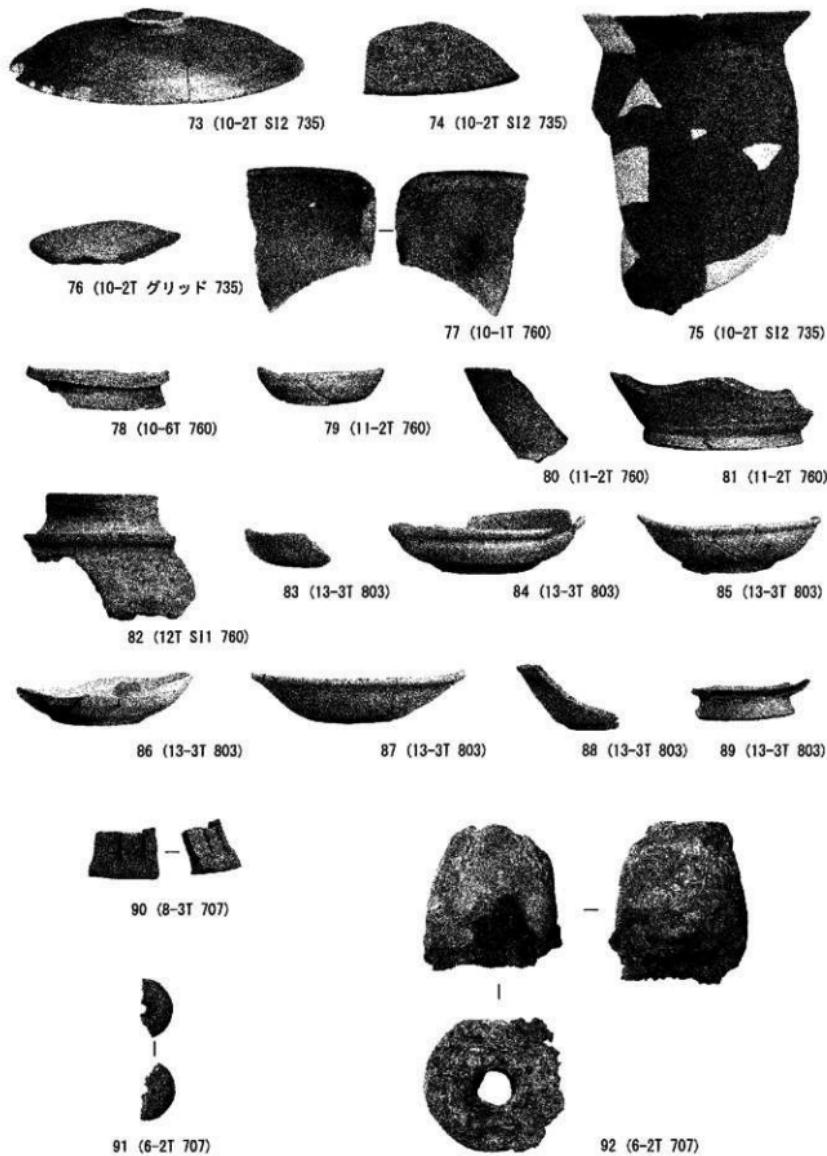
70 (10-2T S12 735)



71 (10-2T S12 735)



72 (10-2T S12 735)





93 (3T 679)



94 (4T 679)



95 (5-1T 707)



96 (5-2T 707)



98 (3T 735)



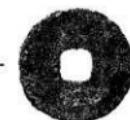
99 (11-1ET 760)



100 (15T 803)



101 (10-1T 735)



102 (5-1T 707)



103 (10-1T 735)



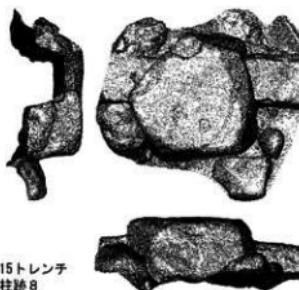
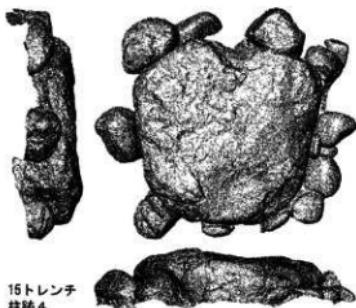
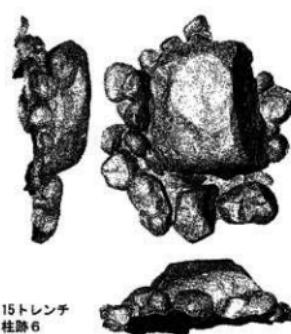
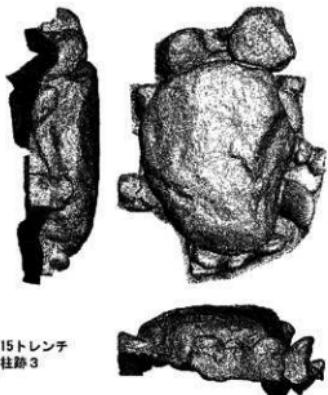
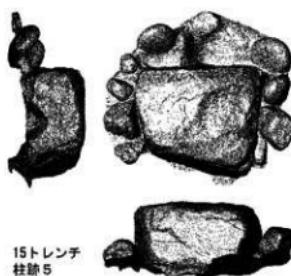
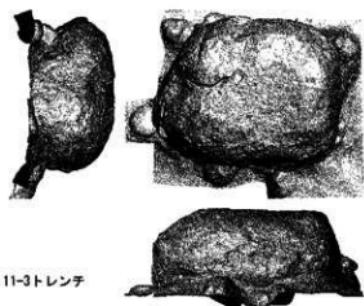
104 (13-2T 803)



105 (13-2T 803)



106 (13-2T 803)



## 抄 錄

ふりがな	こうづけこくぶんにじあと							
書名	上野国分尼寺跡							
著者名	遺跡範囲確認調査報告書							
卷次								
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第494集							
編著者名	田辺芳明 金子智之							
編集機関	高崎市教育委員会							
編集機関所在地	〒370-8301 群馬県高崎市高松町35-1							
発行年月日	2023年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上野国分尼寺跡	群馬県高崎市 東園町	10202	1次 679 2次 707 3次 735 4次 760 5次 803	36° 23' 39" ~ 36° 23' 44"	139° 01' 38" ~ 139° 01' 45"	2016.09.26 ~ 2020.08.28	2287m <sup>2</sup>	保存目的

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上野国分尼寺跡	寺院	奈良・平安	金堂跡 回廊跡 尼坊跡 窓垣跡 壁穴 遺物跡など	瓦瓶 瓦塔 上部器 須恵器 灰陶窯器 円筒瓦 鉄釘 鉄鏃 など	伽藍の主要建物跡や 伽藍地周開の区画施 設に隣接する遺構が 確認された。

所収遺跡名	要約
上野国分尼寺跡	上野国分尼寺の伽藍地範囲及び主要建物の確認を行った。この結果、伽藍地範囲は162m(1町半)四方と推定され、北辺では築垣の基部が残存していた。また、金堂跡・回廊跡・尼坊跡が確認されたことで伽藍配置がほぼ判別明し、回廊跡や尼坊跡では一部の縫石がほぼ原位置で残存するなど遺構の保存状況は良好であった。さらに調査で出土した大量的瓦類の分析から、上野国分尼寺の主要建物の屋根は純瓦葺であったことや、創建が僧寺とそれほど時間を開けてたものでは無いことが推定されている。

---

高崎市文化財調査報告書第494集

## 上野国分尼寺跡

2023年3月24日印刷  
2023年3月31日発行

編集・発行／群馬県高崎市教育委員会  
群馬県高崎市高松町35番の1  
電話 027(321)1111(代表)  
印 刷／野島印刷株式会社

---

